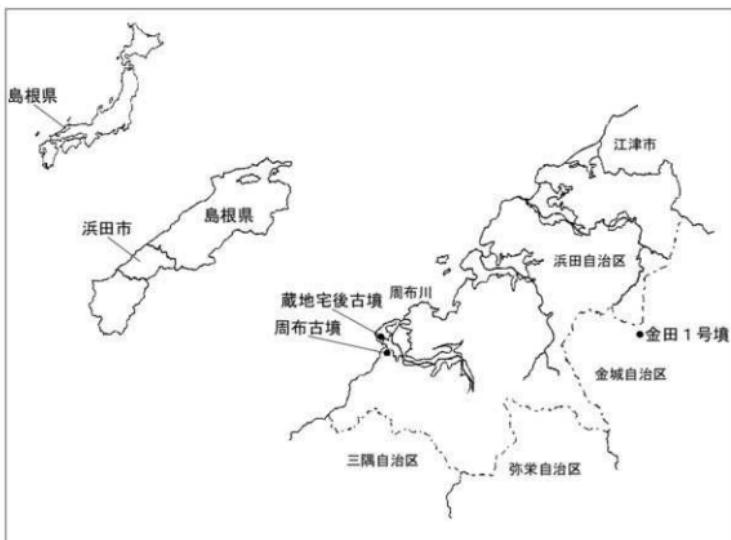


史跡 周布古墳
くら ち たくうしろ
藏地宅後古墳
かな だ
市史跡 金田1号墳

平成14・15・18年度 市内遺跡発掘調査報告書



2008年3月

島根県 浜田市教育委員会



周布古墳 全景（1994年撮影）



周布古墳 調査状況



周布古墳 くびれ部 (T5) 周溝検出状況



周布古墳 出土埴輪



藏地宅後古墳 調査前



藏地宅後古墳 石室側壁検出状況



藏地宅後古墳 石室 羨道側遺物出土状況



金田1号墳 調査状況

序

浜田市教育委員会では市内の遺跡を確認するため、平成 11 年度から国庫補助事業を受けて市内遺跡の発掘調査を実施しています。平成 13 年度までは浜田市東部の国府地区、平成 14 年度からは西部の周布地区の調査も実施しました。なお、平成 18 年度からは市町村合併に伴い、旧那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）も含めた新浜田市を対象として事業を実施しています。

浜田市西部の周布地区には国指定史跡 周布古墳をはじめ多くの古墳があり、中世にはこの地域の代表的武士団である周布氏が漂着民保護をきっかけに朝鮮貿易を行ったと伝えられています。このうち本書は浜田市治和町の周布古墳、津摩町の蔵地宅後古墳、金城町の市指定史跡 金田 1 号墳の確認調査結果をまとめています。

当教育委員会では、これらの文化財の解明を行うための発掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ています。調査の結果、今から約 1,650 ~ 1,300 年前の古墳の大きさや形の違いから、浜田市周布地区と金城地区で、それぞれが独自の地域性をもつていたことが伺えます。

本書はこれらの調査結果と浜田市の遺跡を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習などひろく活用するための基礎資料としてまとめたものです。この資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた島根県教育委員会及び関係諸機関に深く感謝申し上げます。また、あらゆる面から調査にご協力いただきました地元の方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成 20 年 3 月

浜田市教育委員会

教育長 山 田 洋 夫

例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成14・15・18年度にかけて国庫・県費補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業の報告書である。事業は確認調査と関連遺物の整理作業を実施した。

2. 調査は以下の組織で行った。

調査主体 浜田市教育委員会教育長 竹中弘忠（平成14・15年度）
山田洋夫（平成18年度）

調査指導 桑原韶一（浜田市文化財審議会長）平成14・15・18年度
渡辺貞幸（島根大学教授）平成14年度
桑田龍三（島根地質学会会長・浜田市文化財審議会委員）平成14・18年度
大谷晃二（日本考古学協会員・松江北高等学校教諭）平成14年度
中村唯史（島根県立三瓶自然館学芸員）平成14年度
島根県教育委員会 文化財課

調査員 柳原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）
事務局 浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係
文化振興課長 桑田 嶽（平成14～15年度）山根 稔（平成18年度～）
文化財係長 横田良宏（平成14年度）神山真治（平成15年度）

原 裕司（平成18年度～）

主任主事 原 裕司（平成14・15年度）

主任主事 灘山恵子（平成18年度～）

主任主事 近重智美（平成18年度）宮脇 哲（平成19年度）

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力 宮家数馬・細川忠義・小橋清一・栗原善介・吉田雅徳・隅田正三
島根県埋蔵文化財調査センター・池渕俊一・内田律雄・西尾克己
東森 晋・松尾充晶・守岡正司・柳浦俊一

調査参加 岩本秀雄、宇垣春男、宇垣フミ子、釜井ミサヨ、上手文子、掃守 進
國澤直子、佐々木五郎、佐々木定実、澤津 孝、鹿森美鈴、柴田亜希子
坪倉ひとみ、中田洋子、中田貴子、原 有里、半場利定、平野夕子
村上美佐子、宮本徳昭、山田ゆう子、山本勝子、吉賀久雄
吉田安男

4. 出土遺物、実測図及び写真是浜田市教育委員会に保管してある。

5. 本書の執筆編集は柳原が行った。ただし、第6章は文化財調査コンサルタント渡辺正巳が執筆したものを柳原が一部調整した。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 周布地区の遺跡と歴史的環境	2
第1節 概要	2
第2節 周辺の遺跡	8
第3章 周布古墳の確認調査	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 調査の概要	18
第3節 遺物	35
第4章 藏地宅後古墳の確認調査	39
第1節 遺跡の概要	39
第2節 調査の概要	39
第3節 遺物	46
第5章 金田1号墳の確認調査	49
第1節 歴史的環境と周辺の遺跡	49
第2節 遺跡の概要	52
第3節 調査の概要	58
第6章 周布古墳確認調査に伴う自然科学分析	59
第7章 総括	63
第1節 周布古墳について	63
第2節 藏地宅後古墳について	68
第3節 金田1号墳と金城地区の後期古墳について	68

第1章 調査に至る経緯と経過

浜田市教育委員会では国庫補助事業を受けて市内遺跡の試掘確認調査を平成11年度より実施している。これまで平成13年度に国府地区の調査報告書、平成17年度に石見国分寺跡・同尼寺跡の調査報告書、平成18年度に周布地区の調査報告書を刊行した。

平成14年度よりこれまでの国府地区（石見国分寺跡など）の調査に加え、周布地区的試掘確認調査（周布古墳など）を実施していたが、平成17年度の市町村合併により、那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）を含めた新浜田市の範囲を対象とする事業となった。

各年度の調査内容は以下のとおりである。なお、「藏地宅後古墳」は遺跡台帳・遺跡地図では「藏地繁正宅後古墳」となっているが、今後は名称変更し「藏地宅後古墳」として報告する。

- 平成14年度 石見国分尼寺跡・石見国分寺跡・周布古墳の確認調査
 - 平成15年度 石見国分寺跡・周布古墳・周布地区的試掘確認調査
 - 平成16年度 石見国分寺跡確認調査
 - 平成17年度 石見国分寺跡確認調査
　　調査報告書刊行『史跡 石見国分寺跡・県史跡 石見国分尼寺跡』
　　平成14・15・17年度 市内遺跡発掘調査報告書』
 - 平成18年度 藏地宅後古墳確認調査・金田1号墳確認調査
　　調査報告書刊行『浜田市遺跡詳細分布調査—周布地区Ⅰ—』
　　平成15年度 市内遺跡発掘調査報告書』
　　市内分布調査・台帳整理
 - 平成19年度 仕切遺跡確認調査
　　調査報告書刊行『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・金田1号墳』
　　平成14・15・18年度 市内遺跡発掘調査報告書』
　　市内分布調査・台帳整理
- 本報告書には平成14・15年度の周布古墳確認調査、平成18年度の藏地宅後古墳・金田1号墳確認調査の概要をまとめている。調査日程は以下のとおりである。
- ・周布古墳 平成15年1月23日～3月31日
 - 3月10日 中村先生 調査指導
 - 3月15日 桑原先生、渡辺先生、大谷先生 調査指導
 - 3月21日 発掘調査現地説明会開催（約95名参加）
 - 3月25日 桑田先生 調査指導（石材鑑定）
 - 平成15年6月23日～8月4日
 - ・藏地宅後古墳 平成18年9月19日～10月31日
 - 10月24日 島根県教育委員会 調査指導
 - 10月30日 桑原先生調査指導
 - 12月21日 桑田先生 調査指導（石材鑑定）
 - ・金田1号墳 平成19年1月29日～2月5日

第2章 周布地区的遺跡と歴史的環境

第1節 概要

浜田市は石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。平成17年に旧金城町・旧三隅町・旧弥栄村・旧旭町と合併し、南は広島県まで接する広い範囲で新浜田市となった。

周布地区は旧浜田市の西部にあたり、国指定史跡「周布古墳」などが所在する。古代から中世にかけての「那賀郡周布郷」にあたる。なお、「周布」の地名は兵庫県に「修布」、愛媛県に「周敷」がみられ、河流に沿った沖積層として共通するため、「スヘ（洲辺）」で砂地のことをいった可能性がある。二級河川の周布川によって形成された石見地域では比較的大きな平野とその北東側に発達した砂丘地からなる。現在、旧石器時代の遺跡は知られていない。

縄文時代

日脚遺跡で早期の集石炉、土器（押型文土器・織維土器群など）、石器（石鏃、楔形石器、石飾など）が見つかっている。鰐石遺跡では後期～晚期の土器が少量出土している。

弥生時代

鰐石遺跡では前期の土坑群が見つかっている。遺物は前期の土器・石器を中心に後期までの土器が出土している。周布古墳でも前期の土器・石器が確認されている。

また、周布川の河原で後期の仿製鏡が見つかっている。洪水後の河川敷で見つかっており、他に打製石斧が見つかっている。森ヶ曾根古墳では墳丘下で後期の土坑が確認されている。

後期の土器は鰐石遺跡、ツナメ遺跡などで見つかっているが、住居跡などは不明である。

古墳時代

前期古墳は確認されていない。中期古墳は周布古墳が石見を代表する前方後円墳である。国指定史跡のため墳丘自体の調査は行われていないが、隣接地の調査により墳丘は現状より大きい全長約74mで周溝が巡っていたことが確認された。周溝からは多量の葺石と埴輪片が出土し、5世紀前半頃に造られたと考えられる。

日脚遺跡では6世紀前葉の須恵器窯跡が見つかっており、石見で最古の須恵器窯跡である。6世紀中葉の須恵器や埴輪も見つかっており、この時期の窯跡が周辺にあると考えられている。

後期古墳では横穴式石室をもつ古墳が多い。めんぐろ古墳は6世紀前半頃に造られた古墳である。詳細は不明であるが、中部九州系に系譜をもつ横穴式石室とされ、島根県で最も古いものである。須恵器（子持壺・蓋杯など）・鉄器（刀・馬具類）・玉類など豊富な遺物が見つかり、出土品は島根県指定文化財に指定されている。周辺から埴輪片も出土している。

6世紀後半以降の発掘調査された後期古墳は日脚古墳群（1～6号墳）、森ヶ曾根古墳、藏地宅後古墳がある。いずれも石室の基礎部や抜取痕しか残っていないが、石室の形は無袖式横穴式石室（森ヶ曾根古墳）と片袖式横穴式石室（日脚3号墳）が見られる。他に横穴式石室と考えられる石が見られる古墳として鰐石古墳群、塚原山古墳群、小西ヶ丘古墳などがある。

古墳時代中期から後期初めまでは、石見を代表する周布古墳、めんぐろ古墳が造られるが、その後は中小規模の古墳が平野に散在するようになる。古墳時代終末から古代にかけては、ほとんど遺跡が確認されておらず様相が不明確である。

古代

日脚遺跡で遺物と建物跡が確認されているが、他には鰐石遺跡や寺本遺跡で遺物が少量出土するのみである。青口遺跡では丹塗りの高台付土師器皿が2点出土している。

中世以降

中世には鰐石遺跡で遺物（貿易陶磁器・滑石製鍋など）、寺本遺跡（土師器・貿易陶磁器）・市屋敷遺跡（土師器・貿易陶磁器）・ツナメ遺跡（土師器・貿易陶磁器）で遺構・遺物が確認されている。

この頃は石見を代表する武士団である益田氏から分かれた周布氏に関連する遺跡が多く、伝周布氏の墓（五輪塔・宝篋印塔群）、鳩巣城跡（周布城）などがある。慶長5年（1600）年に周布氏が長門へ転封されるまで周布氏の本郷であったと考えられる。周布氏は応永32年（1425）長浜に漂着した李朝の人々を対馬へ護送したこときっかけに受図書と認められ朝鮮と約50回程交易したと李朝実録に記されている。しかし、近年の研究では交易はいわゆる名義貸（偽使）であった可能性が指摘されている。

近世には日脚産砂鉄の「ヒナシ」が製鉄の際に溶融を促進する薬粉鉄として各地のたらに運ばれていたとされている。また、江戸時代末から昭和40年代頃までこの地域でも「石見焼」と呼ばれる陶器と瓦が大量に焼かれていた。窯跡が現在も各地で残存している。

主要参考文献

全般

中尾典史 1933『周布村郷土史』

島根県那賀郡周布村尋常高等小学校 1937『周布村郷土誌』

浜田市 1973『浜田市誌』上巻

浜田市教育委員会 1977『浜田の文化財』

吉田秀樹 1991『日本地名辞典』新人物往来社

平凡社 1995『日本歴史地名大系第三三卷 島根県の地名』

浜田市教育委員会 2002『浜田の文化財』

川原和人 1970『浜田高校所蔵土器』『石西の須恵器』

日脚遺跡

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

鰐石遺跡

前島己基 1973『浜田市鰐石遺跡』『季刊文化財』22号
島根県文化財愛護協会

柳原博英 1996『鰐石遺跡について』『亀山』第23号
浜田市文化財愛護会

柳原博英 1999『島根県鰐石遺跡出土の大陸系磨製石器類について』『田中義昭先生追官記念文集 地域に根ざして』田中義昭先生追官記念事業会

柳原博英 2005『浜田市鰐石遺跡出土遺物－弥生前期土器を中心に－』『古代文化研究』第13号 島根県古代文化センター

周布川河原出土銅鏡

川原和人 1986『周布川河原出土銅鏡』『弥生時代の青銅器とその共伴関係』埋蔵文化財研究会

鳩巣城跡

藤岡大輔他編 1980『日本城郭大系』第14巻 烏取・

島根・山口 新人物往来社

寺井義 1991『石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一本松城跡の城壁状態群についての考察』『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

島根県教育委員会 1997『I 16 鳩巣城跡』

『島根県中近世城館分布調査報告書く第1集』

石見の城館跡』

浜田市教育委員会 2007『浜田市遺跡詳細分布調査 一周布地区I-1』

鈴居古墳

肥後敏雄 1995『鈴居古墳について』『ひのあし』第27号 ひのあし会

森ヶ曾根古墳

浜田市教育委員会 1986『周布小建設予定地内埋藏文化財（森ヶ曾根古墳）発掘調査報告書』

定森秀夫 1989『日本出土の“高畫タイプ”系陶質土器（1）－日本列島における朝鮮半島系遺物の研究－』『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第2集

白井克也 2003『日本における高畫地域加耶土器の出土傾向』『熊本古墳研究創刊号』熊本古墳研究会 1998年10月16日付毎日新聞『浜田の須恵器 朝鮮の工人、島根で製造？ 韓国学者が渡米説否定』

蔵地宅後古墳

内田律雄 1984『出雲刈山4号墳と撇入須恵器』『ふいーるど・のーと』No.6 本庄考古学研究室

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

浜田高校歴史部・大谷晃二 1995『浜田市周布古墳測量調査報告書上』『島根考古学会誌』第12集 島根考古学会

本報告書に確認調査結果を収録。

浜田市教育委員会 2008『藏地宅後古墳』

塚原山古墳群

浜田市教育委員会 1977『浜田の文化財』

浴田遺跡

柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会

めんぐろ古墳

山本清 1957「浜田市めんぐろ古墳出土遺物について」『島根大学論集(人文科学)』第7号 のち、山本清 1971『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会に再録

土生田純之 1980「突起をもつ横穴式石室の系譜」『考古学雑誌』66-3

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

川原和人 1985「浜田市めんぐろ古墳出土の須恵器について」『島根考古学会誌』第2集 島根考古学会

浜田高校歴史部・大谷晃二 1995「浜田市周布古墳測量調査報告(上)」『島根考古学会誌』第12集

島根考古学会

角田徳幸 1997「島根県の横穴式石室」『芸備 第26集』芸備の会

角田徳幸 2007「山陰における九州系横穴式石室の様相」『日本考古学協会 2007年度 熊本大会 研究発表資料集』

本報告書に概要を収録

周布古墳

島根県教育委員会 1963『島根の文化財』第三集

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

内田律雄・曳野律夫・松本雄輝・渡辺貞幸 1991「島根県」『前後方円墳集成』中国四国編 山川出版社

大谷晃二 1993「周布古墳の測量調査はじまる」『石見考古学研修会誌』創刊号 石見考古学研修会

浜田高校歴史部・大谷晃二 1995「浜田市周布古墳測量調査報告(上)」『島根考古学会誌』第12集

島根考古学会

柳原博英 2004「周布古墳の墳丘調査(島根県浜田市)」『島根考古学会誌』第20・21集合併号 島根考古学会

本庄考古学研究室 2005「石見・隠岐の主要古墳一覧」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会

本報告書に確認調査結果を収録。

沃田寺山古墳

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

日脚下浦遺跡

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

川原和人 1978「石見における古式須恵器」『松江考古』第2集 松江考古学談話会

本報告書に概要を収録

寺本遺跡・市屋敷遺跡・ツナメ遺跡

浜田市教育委員会 2007『浜田市遺跡詳細分布調査

一周布地区I-1』

中世周布氏

山根俊久 1978「朝鮮貿易の先駆」『石見の郷土史話』

下巻 石見郷土研究懇話会

井上寛司 1982「貞応二年石見國惣田数注文の基礎的研究」『山陰史談』18 山陰歴史研究会

浜田高校歴史部 1983『歴像 復刊第7号 特集石見の山城について(その2)』

廣田八徳 1985『西石見の豪族と山城』

松村 建 1988「中世後期の村落と土豪」『山陰史談』23 山陰歴史研究会

関周一 1990「十五世紀における山陰地域と朝鮮の交流」一石見国周布氏の朝鮮通交を事例として—『史鏡』第21号 歴史人類学会

和田秀作 1993「陶氏のクーデターと石見国人周布氏の動向—「周布家文書」の紹介—」『山口県地方史研究』第70号

関周一 1994「中世山陰地域と朝鮮の交流」『山陰地域における日朝交流の歴史的展開』報光社

岸田裕之「人沙汰」補考—長州藩編纂事業と現代修史小考—『山口県史研究』三

益田市立雪舟の郷記念館 1994「中世益田氏関係文書特別展~陶隆房のクーデターと益藤兼」

藤川誠 1999「石見国周布氏の朝鮮通交と偽使問題」『史学研究』22号 広島史学研究会

井上寛司 2001「中世の港町・浜田一港湾都市浜田の成立と日本海水運に果たした役割」『浜田市教育委員会

関周一 2002「第四章 山陰地域と朝鮮の交流」『中世日朝海域史の研究』吉川弘文館

関周一 2005「中世における日本海漂流民」『歴史と地理』第582号 山川出版社

藤川誠 2003「周布氏の朝鮮通交」再考～中世日朝交流史の実像と石見国はまだ市民大学講座資料

井上寛司 2006『安富家文書の語るもの』浜田市教育委員会

浜田市教育委員会 2007『浜田市遺跡詳細分布調査

一周布地区I-1』

近世以降

平田正典 1979「石見粗陶器史考」石見地方史研究会

浜田市 1953『浜田の窯業』浜田市商工水産課

浜田市教育委員会 2005『平野窯跡』

浜田市教育委員会 2006『室田窯跡』

森山一止 2003「史料から見た「ヒナシ」について」『たらら研究』第43号 たらら研究会



第1図 周布地区周辺図(1) 明治34年発行 番号は第1表に対応(1/25,000)



第2図 周布地区周辺図(2) 平成11年発行 番号は第1表に対応(1/25,000)

番号	名 称	種 別	所 在 地	概 要	備 考
1	周布古墳	古墳	治和 三宅	前方後円墳、埴輪、弥生土器	国指定
2	藏地宅後古墳	古墳	津摩 奥迫	横穴式石室、須恵器、直刀	
3	三宅辻遺跡	散布地	治和 三宅辻	須恵器片	
4	小西ヶ丘古墳	古墳	治和 小西	円墳	
5	めんぐろ古墳	古墳	治和 三宅	仿製鏡、玉、馬具、大刀、鉢他	出土品県指定
6	沼田遺跡	散布地	治和	須恵器片(子持壺)	
7	大田窯跡	石見俄窯跡	周布	瓦窯	
8	羽根尾窯跡	石見俄窯跡	津摩	瓦、昭和初期	
9	森ヶ曾根古墳	古墳	治和	横穴式石室、須恵器	消滅
10	鷲石遺跡	墳墓群	治和 相田	弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器	出土品一部市指定
11	鷲石古墳群	古墳	治和 鷲石	4基 円墳、埴輪石斧片	
12	日御下溝古墳	古墳	日御	石棺、土師器、須恵器	消滅
13	梯谷窯跡	石見俄窯跡	日御	明治初年頃は瓦窯、昭和初期に丸他窯	消滅
14	日御遺跡	古墳・窯跡他	日御	古墳群、須恵器窯跡、縄文早期の土墳群、集石炉、奈良時代の擬柱社建物跡	
15	鶴居古墳	古墳	日御 鶴居		消滅
16	大田窯跡	石見俄窯跡	日御	瓦窯	
17	ほうどう寺窯跡	石見俄窯跡	熱田 長浜	丸物	
18	佐々木窯跡	石見俄窯跡	長浜	すり跡	
19	渡邊窯跡	石見俄窯跡	長浜	瓦、昭和	
20	永見窯跡	窯跡	熱田 長浜	人形(初期長浜人形)	
21	王子山古墓	古墓	内村	宝鏡印塔 3基	
22	環原山古墳群	古墳	周布	円墳、横穴式石室	
23	高野山下遺跡	散布地	周布	須恵器片	
24	ツナメ遺跡	散布地	周布	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	
25	市屋敷遺跡	集落	周布	土師器、陶磁器	
26	東巣城跡	城跡	周布 委害	山城、木丸、空堀、須恵器	周布城跡、市指定
27	寺本遺跡	集落	周布	須恵器、土師器、陶磁器	
28	伝廣布氏の墓	古墓	周布	宝鏡印塔、五輪塔	
29	川原遺跡	散布地	穂出	下駄	
30	沃田寺山古墳	古墳	治和 門田	刀劍、須恵器	消滅
31	吉地古墓	古墓	吉地	五輪塔、宝鏡印塔	
32	田橋鍛冶屋跡	製鉄遺跡	田橋		
33	大谷鍛跡	製鐵遺跡	西村	鉄滓、屋号 たら	
34	大谷鍛冶屋跡No.1	製鐵遺跡	西村	字 鍛冶屋	
35	大谷鍛冶屋跡No.2	製鐵遺跡	西村	字 鍛冶屋	
36	大谷鍛冶屋跡No.3	製鐵遺跡	西村	字 鍛冶屋	
37	大谷鍛冶屋跡No.4	製鐵遺跡	西村	字 鍛冶屋	
38	青ノ城跡	城跡	西村 青口	山城	
39	坂辻遺跡	散布地	西村 坂辻	打製石斧	
40	坂辻西遺跡	散布地	西村 大谷下	磨製石斧片	
41	青口遺跡	散布地	西村 大谷下	土師器皿	
42	青口古墓	古墓	西村 大谷下	五輪塔	
43	木引地遺跡・青野鍛冶屋跡・青野軒跡	散布地 製鐵遺跡	治和 木引地、西村	磨製石斧片、字 鍛冶屋、鉄滓	
44	日御東遺跡	散布地	日御	須恵器	

第1表 周布地区 遺跡概要

第2節 周辺の遺跡

周布地区から出土した遺物は周布小学校や浜田高校に保管されているものが多く、一部は既に紹介されている（川原 1970・島根県教委 1985）。周布小学校には今回紹介した遺物の他に坂辻西遺跡の磨製石斧1、坂辻遺跡の打製石斧1、「三宅古墳」「三宅ノ前ノ」と注記された須恵器蓋片、塚原山古墳群の須恵器片などがある。

日脚下浦古墳（遺跡）（第3図 1～16）

日脚町の周布川河口に近い位置にあり、詳細な位置は不明確だが周布小学校所蔵の遺物はラベルから3種類に分けられる。

「日脚台」（第3図 1～6）

昭和25年に石塀の中から出土したもので、石棺をもつ古墳の可能性がある。須恵器蓋4、コップ形須恵器1、土師器杯1がある。須恵器は古式の様相を示すものとして、既に紹介されている（川原 1978）。須恵器蓋（1～4）は口唇部内面に上向きの沈線を入れて明確な段を造っている。天井部は途切れない丁寧な回転ヘラ削りが施され、体部中央にやや下向きの明確な突帯をつくる。（5）のコップ形須恵器は底部にヘラオコシ痕が残る。（6）の土師器杯は外面と口縁部内面がヘラミガキで丁寧に仕上げられている。ミガキは体部外面には斜めに幅5mmで行われ、口縁周辺にはやや細く幅2～3mmの単位で横方向に施される。

「日脚御幸地のうしろ」（第3図 7～11）

昭和26年に出土したもので、須恵器蓋3、須恵器有蓋高杯1、土師器高杯1がある。

（7・8）は有蓋高杯の蓋の可能性があるが、（9）のみ天井部にカキメが施される。（11）は土師器の高杯で全体的に分厚い造りである。杯部内面のみが風化している。脚部内面以外はヘラミガキで仕上げられるが器壁に凹凸が目立つ。脚部には2方向で対に外から穿孔されているが、穿孔後のヘラミガキで穴はつぶれており、1つは貫通もしていない。

「日脚八幡宮境内西端地」（第3図 12～16）

昭和26年に出土したもので、須恵器甕2、蓋1、有蓋高杯2がある

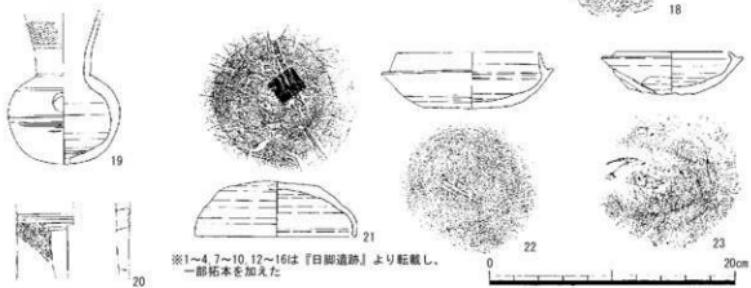
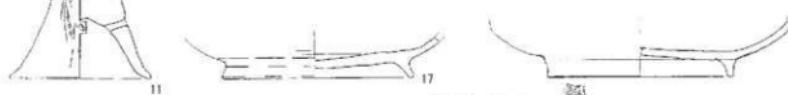
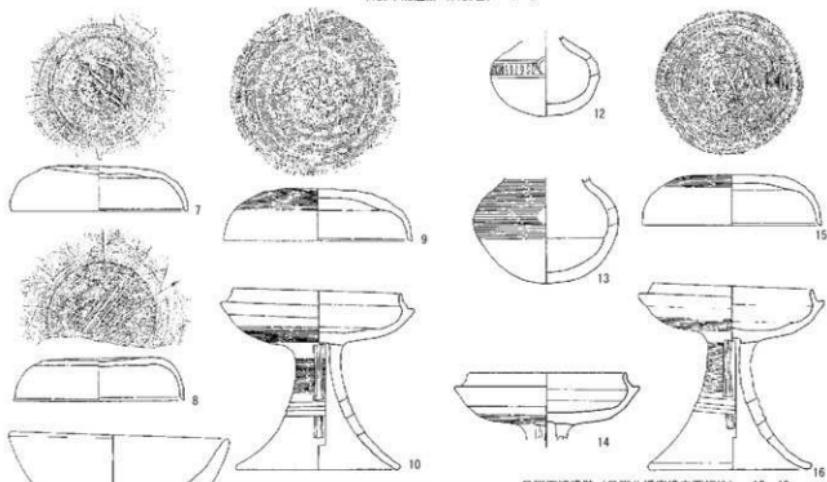
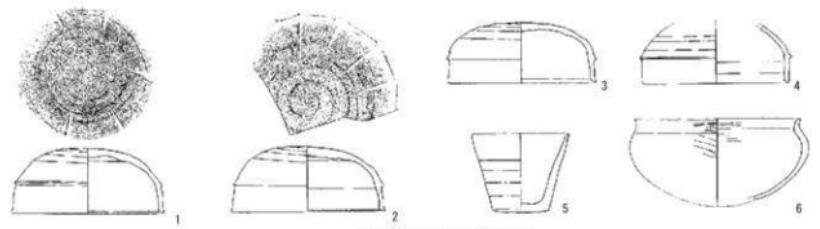
青口遺跡（第3図 17・18）

西村町の旧宅地跡の脇で高台の付く土師器皿2個体が採取されている。いずれも全面丹塗りでハケの痕跡が残る。全体的に平滑でヘラミガキが施されていると見られるが、内面に暗文は確認できない。貼付高台は（18）が剥離しており接合方法がわかる。本体杯の高台接合部に「×××××」と連続に刻みをいれて高台を貼付け、周辺の粘土を伸ばしている。このため、高台側の剥離面には「×××××」の陽刻が残る。（18）はやや上向きになる口縁端部付近まで残っているが、端部を丸めているかは不明である。淡黄褐色から淡灰褐色を呈し、焼成がやや悪い。在地産の土師器と考えられる。

出土地不明須恵器（第3図 19～23）

（19）は甕で頸部には1列以上の波状文とカキメ、体部にはカキメと6列波状文が残る。（20）は器台の脚部で、沈線2・透穴2以上・2列波状文が確認できる。（21）の蓋は口縁部が直線的で、内面のやや上がった場所に浅く沈線が施される。天井部は3周分のヘラ削り痕が残る。（22）の杯は底に浅く板目状の痕跡が残り、ヘラ削りは底部周囲に2周分施されている。

（23）はめんぐろ古墳出土の紙が貼り付けてあるが、時期的に下り保管段階の混入と考えられたためか、これまでの紹介遺物からは除外されている。底部に小型の高杯脚部が溶着しており、窓内



第3図 周辺の遺跡(1) (周布小学校所蔵品)

では伏せ焼で上に高杯を置いた可能性がある。底部は不定方向のヘラ削りが行われている。

浜田高校保管「周布・周布三宅」出土須恵器（第4図 24～30）

浜田高校に保管されていた須恵器で（24～28）は「周布出土品」、（29・30）は「周布三宅」と記されている。現在は周布の三宅周辺では古墳はめんぐろ古墳、周布古墳しか確認されていないが、他にいくらかの古墳が存在した可能性がある。（24）は底部ヘラ切り、（25）は底部回転ヘラ削りの杯である。（26）は底部に3本の板状圧痕が残り、底部周辺にヘラ削りを施している。（29）は大型甕の口縁で外面に沈線2本の区画間に板を押し当て縦の直線文をついている。

日脚東遺跡（第4図 31）

旧山陰道沿いの丘陵裾で須恵器片が拾われ、平成13年に周辺の宅地工事に伴い試掘調査をおこなったが遺跡は確認されなかった。（31）は底部が平坦になる杯で底部周囲に回転ヘラ削り痕が残る。

専称寺横出土遺物（第4図 32）

1958年に採取された須恵器の甕片で位置は特定できないが、現在の専称寺周辺か、北西の小西ヶ丘古墳の可能性もある。

浴田遺跡（第4図 33～35）

周布古墳から約300m丘陵を下った神明八幡宮（大神社）横の墓地周辺にあたる。これまで須恵器持壺（33）が紹介されている（第1節 参考文献参照）。周辺に古墳があった可能性もある。他に須恵器甕片（34）、中世土師器底部（35）が表採できた。

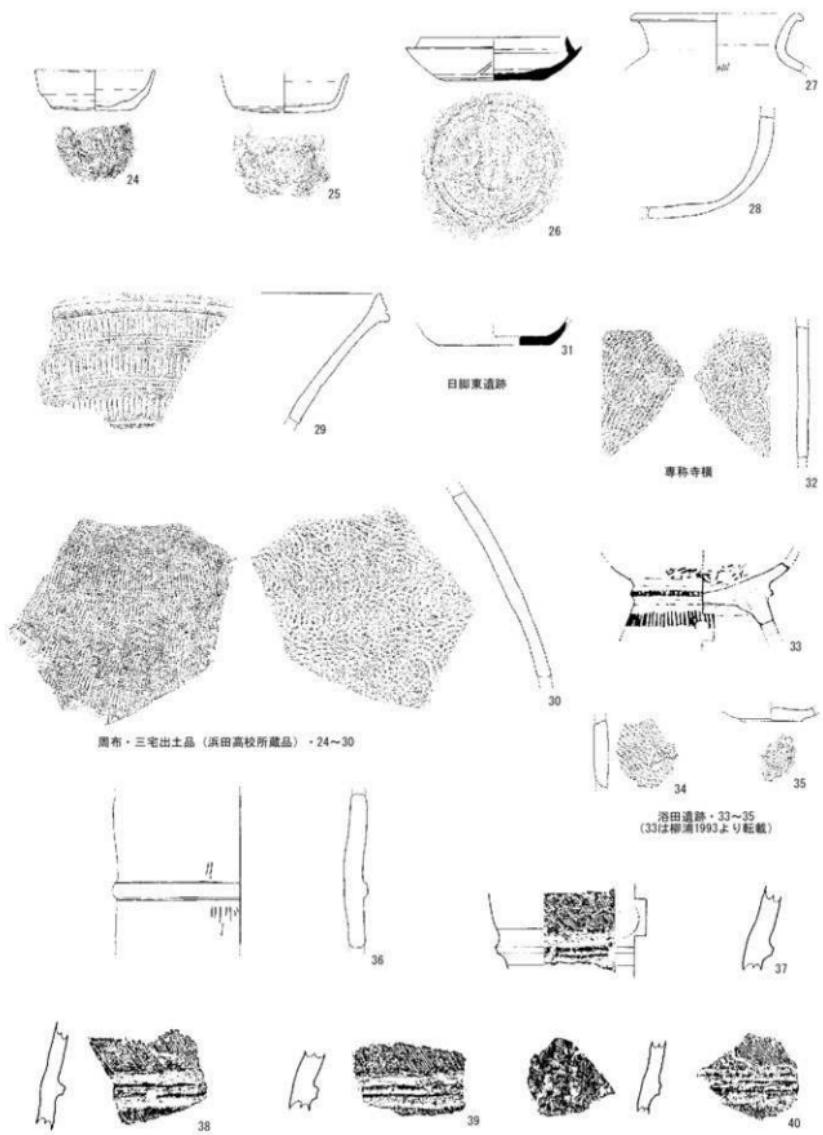
めんぐろ古墳（第4図 36～40・第5図）

石見地域を代表する後期古墳で、出土遺物の一部は島根県指定文化財になっている。中部九州の石室との関係が指摘される横穴式石室から見つかった遺物、周辺で見つかった埴輪が紹介されている（第1節 参考文献参照）。聞き取りによると、もともと10～20mの高まりがあり、明治の国道敷設時に石材をもちだしており、それまでは石室内に入れたとのことである。石室部分は烟であったが、昭和24年の水田拡張工事で石室基底部と遺物が見つかった。石材は市道沿いの石垣（石室周辺・周布古墳前方部前端の烟脇の水路）などに転用されている。石室内の「切り込みある柱状の石」は多角形状の石柱で周辺の個人家の庭や周布小学校にある。

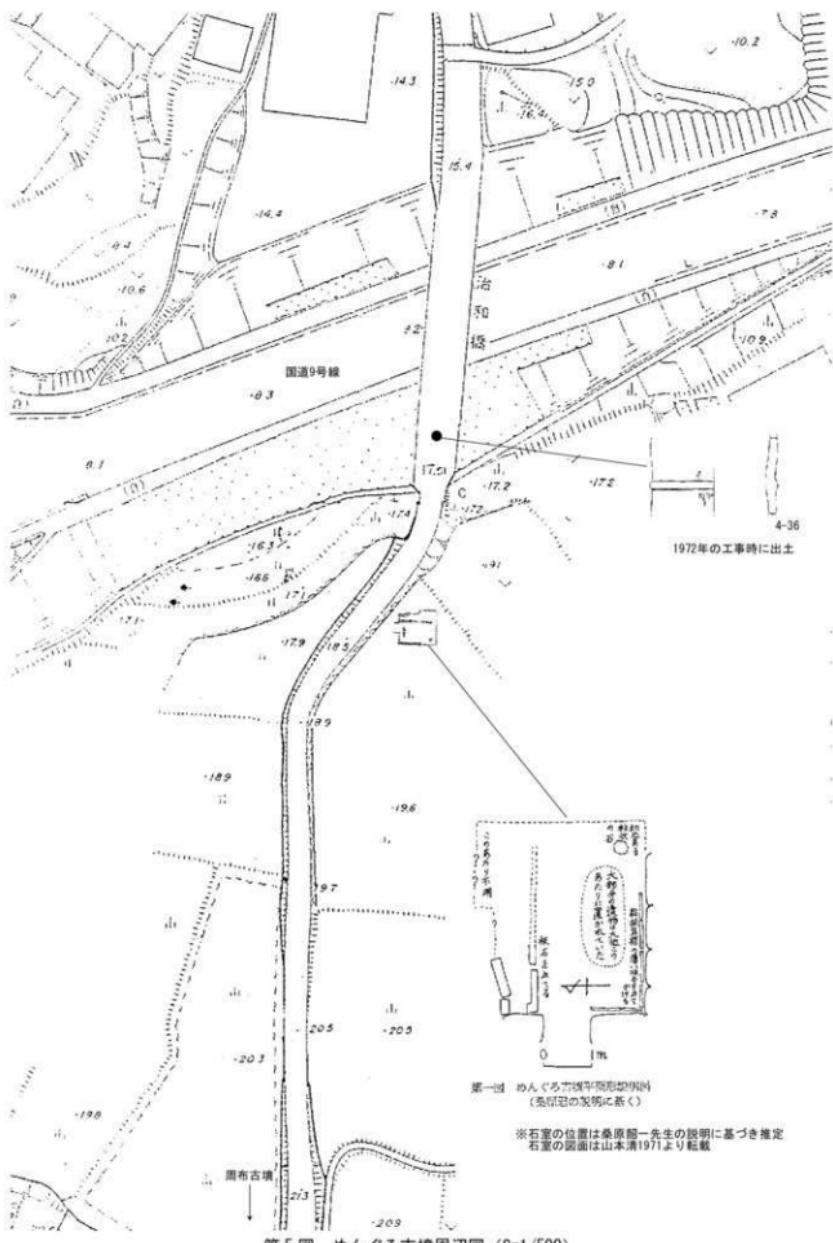
現在、島根県古代文化センターにおいて再整理作業中で、出土遺物は次のとおりである。

須恵器	蓋5・杯8・高杯蓋1、甕1、壺1、堤瓶2、短頸壺1、甕1、装飾付子持壺1
馬具	馬鐸1（2点現存せず）、三環鈴1、1字鏡板付轡1、轡1、金銅装平形雲珠1
	木芯鉄輪鎧1、鉗具1、鎧金具2
武器・刀装具	三輪玉4、鐵鏃5、大刀10、石突1、鉄槍1
工具	鹿角製刀子2、刀子1
装飾品	獸文鏡1、鈴剣1、切子玉1、小玉1
祭祀具	石棒1、土玉1

石室以外に、周辺から埴輪が見つかっている。（36）は1972年の古墳北側の国道9号線工事（丘陵切通し）の際に見つかった埴輪片である。（37～40）は周布小学校所蔵のもので、その後の国道9号線工事で出土した可能性がある。埴輪には土師質（36・37）と須恵質（40）のものがある。（36）はタガが低く、外面にタテハケがかろうじて確認できる。他の破片はタガの高さ0.4～0.9cmで、断面は上面のナデによりM字状に凹む。（37）には円形の透穴が一部残る。



第4図 周辺の遺跡(2)



第5図 めんぐろ古墳周辺図 (S=1/500)

第一図 めんぐろ古墳周辺切引図
(発掘記の説明に依く)

※石室の位置は桑原龍一先生の説明に基づき推定
石室の断面は山本清1971より転載

第3章 周布古墳の確認調査

第1節 遺跡の概要

周布古墳は周布平野と日本海を見下ろす丘陵地に造られた、石見で2番目の大きさをもつ前方後円墳である。現在残る墳丘は国指定史跡になっている。昔から「瓢塚」「おんぐろ」と呼ばれていた。現在は前方部などが削平されているが、現状で全長約65mを測る。斜面には拳大の河原石が多く見られ、古墳の斜面に置かれた葺石と考えられる。埴輪や須恵器の破片が見られる。

周布平野には、周布古墳の他に石見最古の須恵器窯跡である日脚窯跡群や、優美な子持壺など豊富な副葬品を出土した県内最古の横穴式石室をもつめんぐろ古墳（出土品県指定）など多くの古墳が見られる。

古墳は近世山陰道と大麻山への登山道の分岐点近くにある。前方部前端と南東丘陵の切断部分が近世山陰道になっており、人々の往来は多かったと見られる。古墳に関連する記述として管見で最も古いものは、1866（慶応2年）の石州口の戦いの記録「防長回天史・1912（大正元年）に記録」の「四境戦争 其三」内の周布周辺の地図の該当地に「小丸」「小丸山砲臺」の記述がある。現在の周布古墳の上に幕府軍が大砲を据えて長州軍を攻撃したという言い伝えがあり、後円部頂にある凹みがその際に掘られたとも言われている。

また、1883（明治16）年頃の治和村村誌（史跡探訪会 1989『浜田の歴史と伝承』第3号）には以下の記述がある。

陵墓

亀山

村ノ南ノ方、字三宅辻ニ築山アリ、其形亀ニ似タリ、故ニ亀山ト言伝ウ。此山ニ長サ貳間、横壹間半の石棺アリ、四方石疊ニシテ、ニツノ切石建設シ、側ニ大小武刀アリ（シ）ト云ウ。根消シテ不詳。何々ノ墓トモ見認難ケレドモ、今ニ其形アルヲ以テココニ登記ス。

この記述は周布古墳、めんぐろ古墳、あるいは既に消滅した付近の古墳のいずれかを指している可能性が高いが、「小丸」「小丸山」「亀山」の呼称では円墳か前方後円墳かも決めていく。後述の『周布村の歴史』には昭和5年10月に三宅の古墳を発掘したとも記されている。

周布古墳が「三宅の瓢型古墳」として特定できるのは1933（昭和8）年以降で、以下にその後的主要文献と関連事項を示す。なお、1925（大正14）年の『島根縣史』には周布古墳らしき記述は見られない。

1933（昭和8） 中尾典史『周布村の歴史』

1935（昭和10） 後藤藏四郎「周布村三宅ノ瓢型古墳」『島根縣史跡名勝天然記念物調査報告7』

1936（昭和11） 国指定史跡になる（12月16日）。

1937（昭和12） 周布村尋常高等小学校『周布村郷土誌』

1950（昭和25） 浜田市役所「ひさご塚をめぐって」『浜田』

1959（昭和34） 山本清『新修 島根縣史』通史編一

1963（昭和38） 島根県教育委員会『島根の文化財 第3集』

1973（昭和48） 浜田市『浜田市誌 上巻』

1975（昭和50） 前方部～くびれ部の擁壁工事

- 1978(昭和 53) 前方部前端の擁壁工事
- 1979(昭和 54) 前島己基「石見」『山陰古代史の周辺』<中>山陰中央新報社
- 1980(昭和 55) 内田律雄「出雲の前方後円墳について」『山陰史談』16
- 1981(昭和 56) 内田律雄「周布古墳」『島根県大百科事典』上巻 山陰中央新報社
- 1982(昭和 57) 「周布古墳」『古墳事典』東京堂出版
- 1985(昭和 60) 前島己基『日本の古代遺跡 島根』保育社
- 1985(昭和 60) 島根県教育委員会『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』
- 1991(平成 3) 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸「第5章 石見」
『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 1992(平成 4) 大谷晃二「石見地域の古墳文化～地域の古墳の教材化をめざして～」
浜田高等学校研究紀要 17
- 1993(平成 5) 大谷晃二「周布古墳の測量調査はじまる」
『石見考古学研修会誌』創刊号 石見考古学研修会
- 1995(平成 7) 大谷晃二「石見」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 1995(平成 7) 「周布古墳」『島根県の地名』平凡社
- 1995(平成 7) 浜田高校歴史部・大谷晃二「浜田市周布古墳測量調査報告〔上〕」
『島根考古学会誌』第 12 集 島根考古学会
- 1995(平成 7)a 渡辺貞幸「周布古墳」『日本古代遺跡辞典』吉川弘文館
- 1995(平成 7)b 渡辺貞幸「山陰の大型古墳」『第1回三ツ城古墳シンポジウム記録集
大型古墳の出現と謎の五世紀』東広島市教育委員会
- 1997(平成 9) 田中義昭「豪族と古墳、民衆と生産」
『図説 日本の歴史 32 図説 島根県の歴史』河出書房新社
- 2003(平成 15) 浜田市教育委員会による周辺の確認調査(T1 ~ T13)
- 2003(平成 15) 大谷晃二『古墳時代の浜田・石見～考古学からみた浜田地方の歴史～』
文化講演会資料
- 2004(平成 16) 柳原博英「周布古墳の墳丘調査」『島根考古学会誌 第 20・21 集』島根考古学会
- 2005(平成 17) 渡辺貞幸「地域王権の時代」『島根県の歴史』山川出版社
- 2005(平成 17) 本庄考古学研究室「石見・隠岐の主要古墳一覧」
『島根考古学会誌 第 22 集』島根考古学会

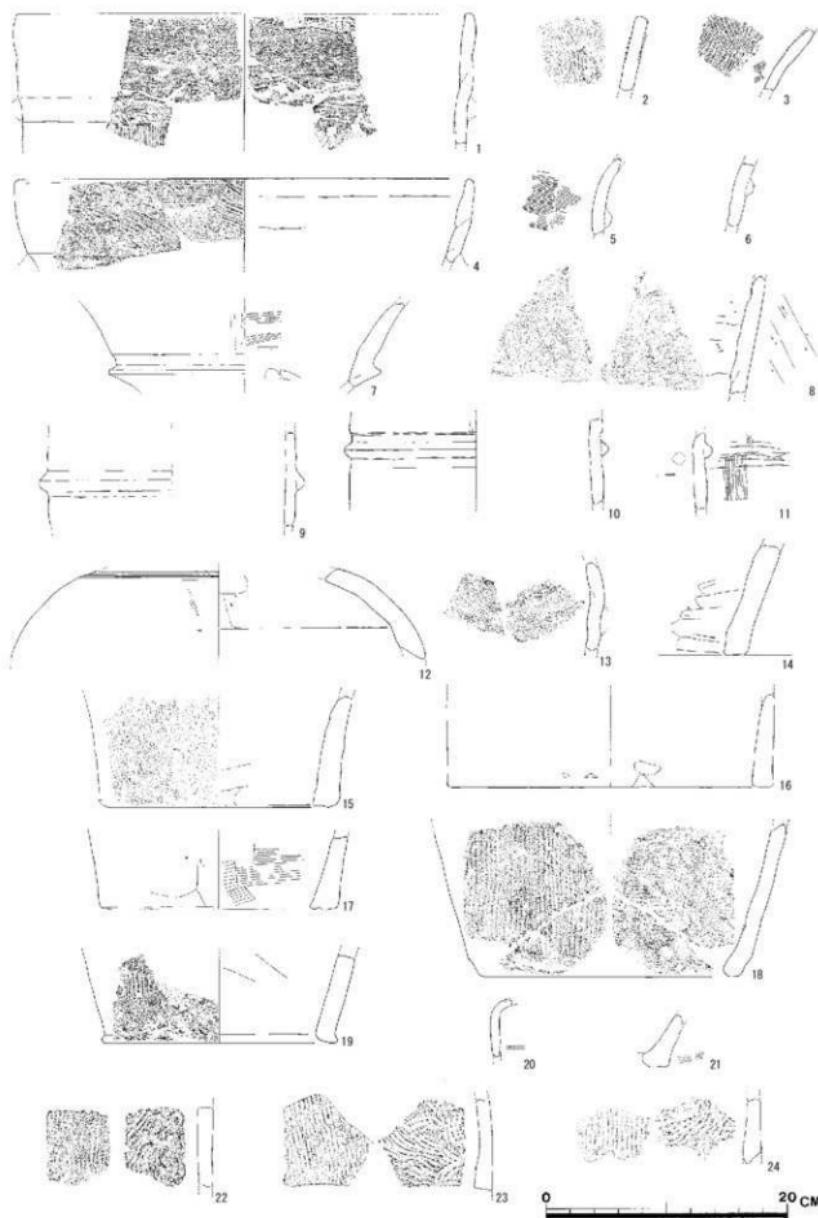
古墳の規模は、測量図が後藤 1935、島根県教育委員会 1963（復元全長 72.4 m）、浜田高校歴史部・大谷 1995（復元全長 69 m 前後）に掲載されており、復元案は内田他 1991（復元全長 68 m）がある。特に 1995 年の測量調査報告では、現在残る墳丘部分の復元が行われている。

また、古墳の所在する「三宅」の地名、周辺に「宮家」姓の家があることから古墳時代の倭王権の直轄地である「屯倉」「屯田」との関連を指摘する論考（後藤 1935・内田 1980・渡辺 1995b など）がある。更に踏み込んで周布古墳以前の大型古墳が確認されていないために、その出現を突発的と見て在地豪族の強大化というより外部勢力の影響を強く見る説もある（前島 1979・1985）。

古墳の時期は大まかに古墳時代中期・5 世紀代とされることが多いが、表採された墳輪に古い様



第6図 周布古墳周辺図 (S=1/2,500)



第7図 調査以前出土遺物

相を認める指摘もあった（大谷 1993）。その後、埴輪や須恵器片が採取されていること、めんぐる古墳との関係から中期末～後期初頭（大谷 1995）とされていた。

現在残る墳丘は国指定史跡のため調査されたことは無いが、墳丘で採取された埴輪が報告されている（島根県教育委員会 1985）。また前方部からくびれ部の擁壁工事（1975 年）、前方部前端の擁壁工事（1978 年）の際に埴輪と弥生土器が見つかっている。工事の際に作成された前方部前端の墳丘土層図（第 10 図）と遺物はすでに一部紹介されている（大谷 1993、浜田高校歴史部・大谷 1995）。埴輪は朝顔形と普通円筒があり、すべて淡灰褐色から褐色系の土師質のものである。摩滅しており調整等観察しにくいものが多い。弥生土器は前期の甕片、須恵器は甕の体部片である。

調査前出土遺物（第 7 図）

（1～4・6・8・13～15・18・20・21）は 1978 年の前方部前端の擁壁工事で出土した遺物、（5・7・9～12・16・17・19・22～24）は 1990 年以降に墳丘で表探されたものである。

埴輪（第 7 図・1～19）

（1・2）は円筒埴輪の口縁端部付近の破片である。いずれも上段タガの剥離痕が残っており、口縁上端から 6.1～6.8 cm 下がった場所にタガが付く。復元口径は 37.6 cm である。（1）は一次調整として外面に粗いタテハケ・内面に粗いヨコハケを行い、タガの貼付位置をナデで凹ませている。二次調整として端部外面を中心にヨコナデを施している。剥離したタガの痕跡は幅 2 cm である。（2）は一次調整として外面に粗いタテハケ・内面に粗いヨコハケを行い、タガの貼付位置をナデで凹ませている。二次調整として端部外面に断続的なヨコとナメの粗いハケ、内面にヨコナデを施している。剥離したタガの痕跡は幅 2 cm である。接合痕を見ると 4～5.5 cm 程の粘土板を積み上げて造っている。外面には黒斑が見られる。（3）は体部の破片で一次調整に外面に細かいタテハケ・内面はナデかケズリ、二次調整に粗いタテハケを行っている。（4～7）は朝顔形埴輪の口縁から受部で、大きく開く口縁の下に突帯をつくり複合口縁状に仕上げている。（6）は摩滅しているが二次調整のヨコハケらしき横線が見える。（7）は厚い口縁部に対して受部は屈折し、器壁が薄くなる。（8～13）は胴部片である。（8）は外面に下から上に砂粒移動が見られ、ケズリと考えられる。内面は凹凸がありヨコ方向のケズリである。（9～11）はタガが付く胴部で、タガは断面が三角形に近く、高さ 0.7 cm・幅 1.4 cm 程である。（11）は一次調整で外面に細いタテハケ・内面にヨコハケを行い、二次調整としてタガ上端にかかるタテハケを一部施している。（12・13）は朝顔形埴輪の肩部から胴部である。（12）は肩部が丸く沈線が 6 本以上施される。内面はヘラケズリである。下端は接合面で剥離している。（13）は一次調整のタテハケ後、タガの貼付位置をナデで凹ませ、タガの下に二次調整の粗いタテハケを行っている。（14～19）は底部片でいずれも底部再調整は行っていない。（14）は内面に横方向のケズリ、（15）は外面に粗いタテとナメのハケ・内面は横方向のケズリ、（17）は外面にタテのケズリ・内面は粗いヨコハケである。（15）は一次調整で細かいハケ、二次調整で粗いハケを使っている。（19）は外面にタテハケが残る場所と横ケズリが残る場所がある。底部径は復元で 19～27 cm である。内面は不明瞭だがヘラケズリを施しているものが多い。

弥生土器・須恵器（第 7 図・20～24）

（20・21）は弥生土器である。（20）は外面に沈線が 1 本残る甕の口縁部で体部は直線である。（21）は厚みのある底部片で外面に一部タテハケが残る。（22～24）は須恵器である。甕の体部片で（22）は外面格子状の叩き底とカキメ、（23・24）は外面平行叩き、内面はいずれも同心円の当具痕が残る。

第2節 調査の概要

平成14年度にT1～T9(62m²)、平成15年度にT10～T13(32m²)の調査を実施した。古墳の範囲を確認するため、国指定地(現在残る古墳部分)に隣接して調査区を設定している。墳丘と周辺の測量図は既に公表されている(浜田高校歴史部・大谷晃二)。調査はこの測量図に加え、新たに墳丘隣接地に基準点を設置して調査を実施した。

平成14年度は9地点(T1～T9)を調査した。現在残る墳丘部分から1～4m程離れた場所で列状に並ぶ石や地山の段が確認され、もともとの古墳の端と考えられる。T4・T5では古墳の端から幅約7m・深さ0.6m程の溝が造られており周溝と考えられる。周溝は多量の石が投棄されており、埴輪片が多く見つかった。ある時期に墳丘外側は大きく削平され、葺石で周溝が埋め立てられたと考えられる。基本的には墳丘の下半部は地山を削り出していると考えられるが、くびれ部(T5・T10)では盛り土で墳形をつくり据石、葺石を配置したように見える。

平成15年度は前年度調査結果を基に4地点(T10～T13)を調査し、同様に古墳の端を確認できた。しかし、前方部前端(T13)で確認された溝は周溝にするには規模が小さく、前方部の復元は今後の検討課題となった。これまで前方部側は南から延びる丘陵を切断して古墳を造ったと考えられている。周溝外側(T12)では盛り土等は確認できず、周堤など古墳関連施設の有無は不明である。また、周溝外側の谷部(T11)では縄文～弥生時代の土器・石器類が出土した。1975～1978年の墳丘の擁壁工事に伴う遺物にも、埴輪に混じて弥生土器片が認められる。おそらく古墳造営時にもとあった縄文～弥生時代の遺跡を壊している可能性がある。なお、弥生時代前期の遺物(土器・黒曜石)が最も多い。

T1(第11図)

前方部前端の畑に設定した1m×9mの調査区である。現地標高は27.7mである。標高27.4m、現存前方部から約5m離れた場所で幅3.6m・深さ約70cm(標高26.7m)の東西方向の溝を検出した。溝は二段掘状になり、上段は緩やか、下段は箱状で底面は幅1.4mを測る。溝からは、特に墳丘側の中位で拳大から人頭大の石が多くみられた。溝上層から黒曜石の剥片などが出土した。この溝は他の調査区で確認された周溝に比べ規模が小さく、周溝とするには疑問も残る。

溝の埋土上層や石の間から黒曜石・埴輪片などが出土した。

T2(第12図)

後円部西側に設定した1m×5mの調査区である。現地標高は25.1mである。現存後円部から2.5m程までは地山面がごく緩やかに傾斜するが、途中から高さ0.3m程の段がつき、灰色粘質土から拳大から人頭大の石が約73個確認された。また、30～40cmの大石が並んで検出され、葺石の基礎石と考えられる。段の下面の地山面に接しており原位置と考えられる。埴輪片・須恵器片が出土したが、須恵器片は墳丘側の転落葺石よりも外側で散在している。

T3(第12図)

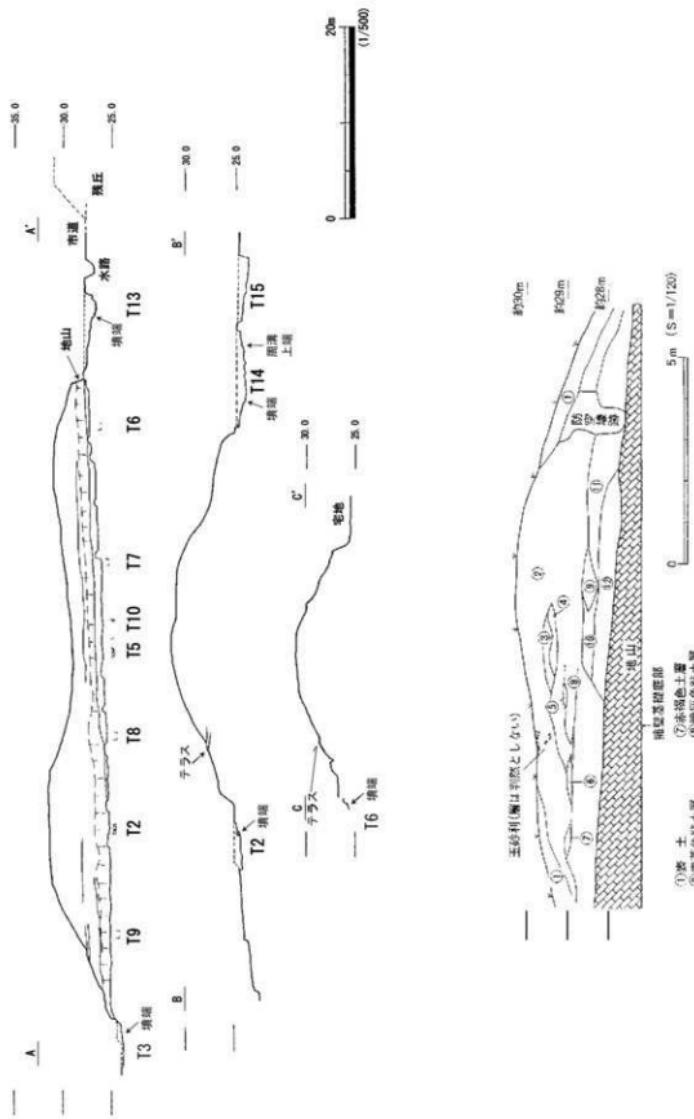
後円部北側に設定した1m×5mの調査区である。現地標高は23.1～23.8mである。現在の見かけの後円部裾から約1m程離れた場所で地山面に段が付く。転落葺石が約25個、埴輪片がごく少量



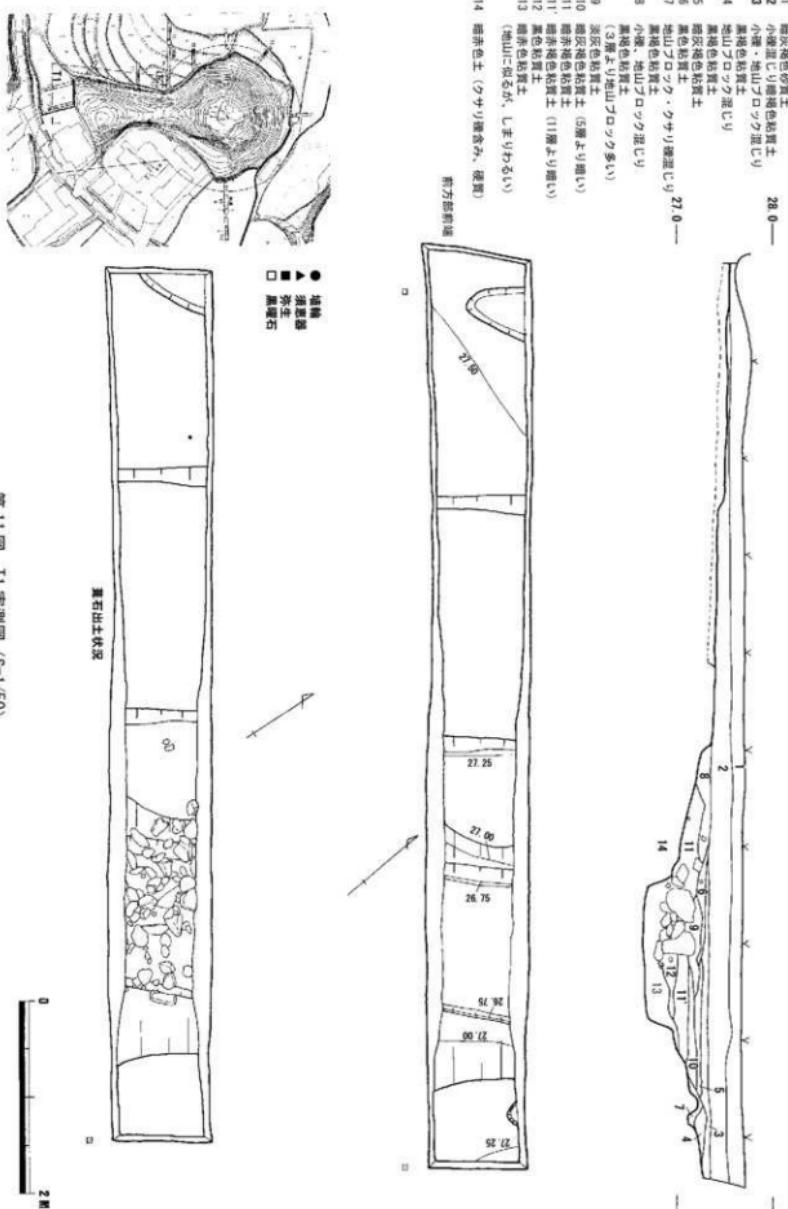
第8図 周布古墳測量図 (S=1/500)



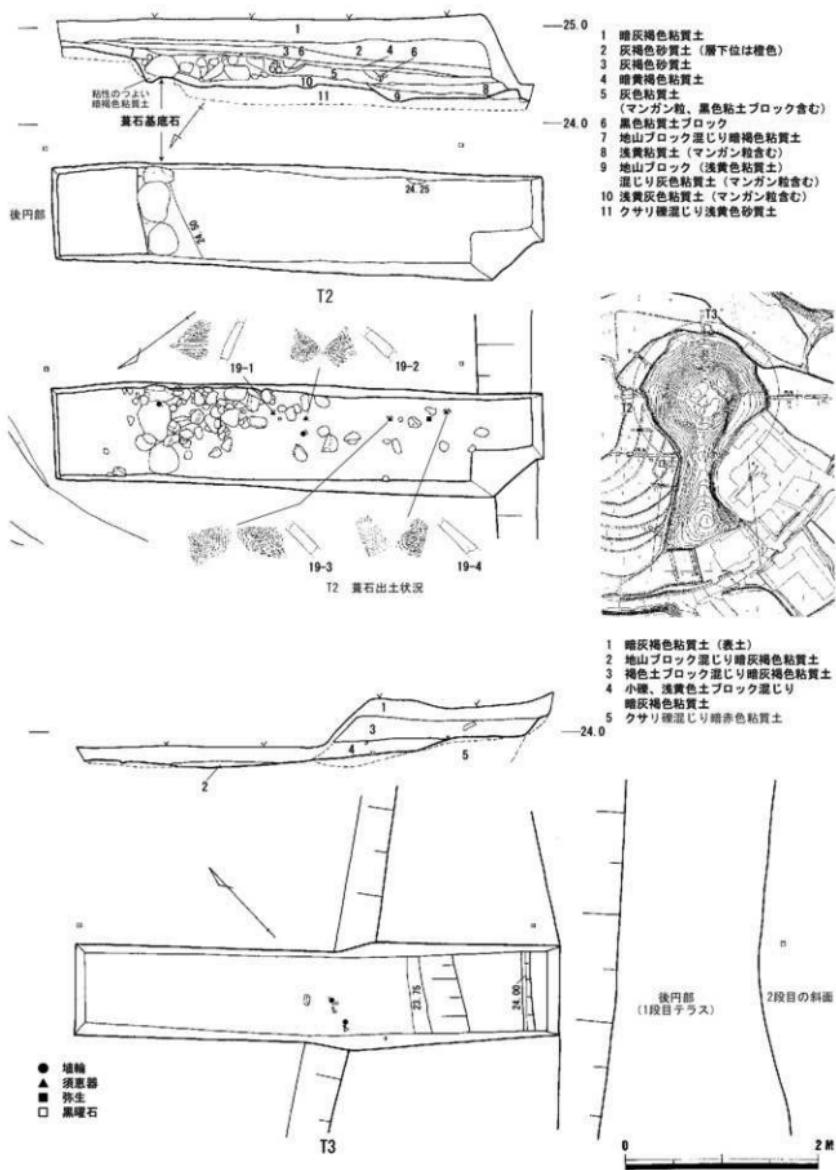
第9図 周布古墳測量図 (S=1/250)



第10図 塙丘断面図・前方部前端土壌断面図



第11図 11測図 (S=1/50)



第12図 T2・T3実測図 (S=1/50)

出土した。

T4 (第 13 図)

後円部東側に設定した $1m \times 10m$ 調査区である。現地標高は 24.7m である。現存後円部から約 1.5m 程まで地山面がごく緩やかに傾斜し、途中から 0.4m 程落ち込み、底幅 5.6m 程の溝になる。なお、溝底面はもともと地山にクサリ礫が混じっていることもあり古墳外側では凹凸がある。石を含む黒色粘質土（標高 22.8m）は厚さ 10 ~ 20cm である。墳丘側では溝の上層の黒色粘質土から転落葺石の可能性のある中~小型石が約 70 個確認された。

T5 (第 13 図)

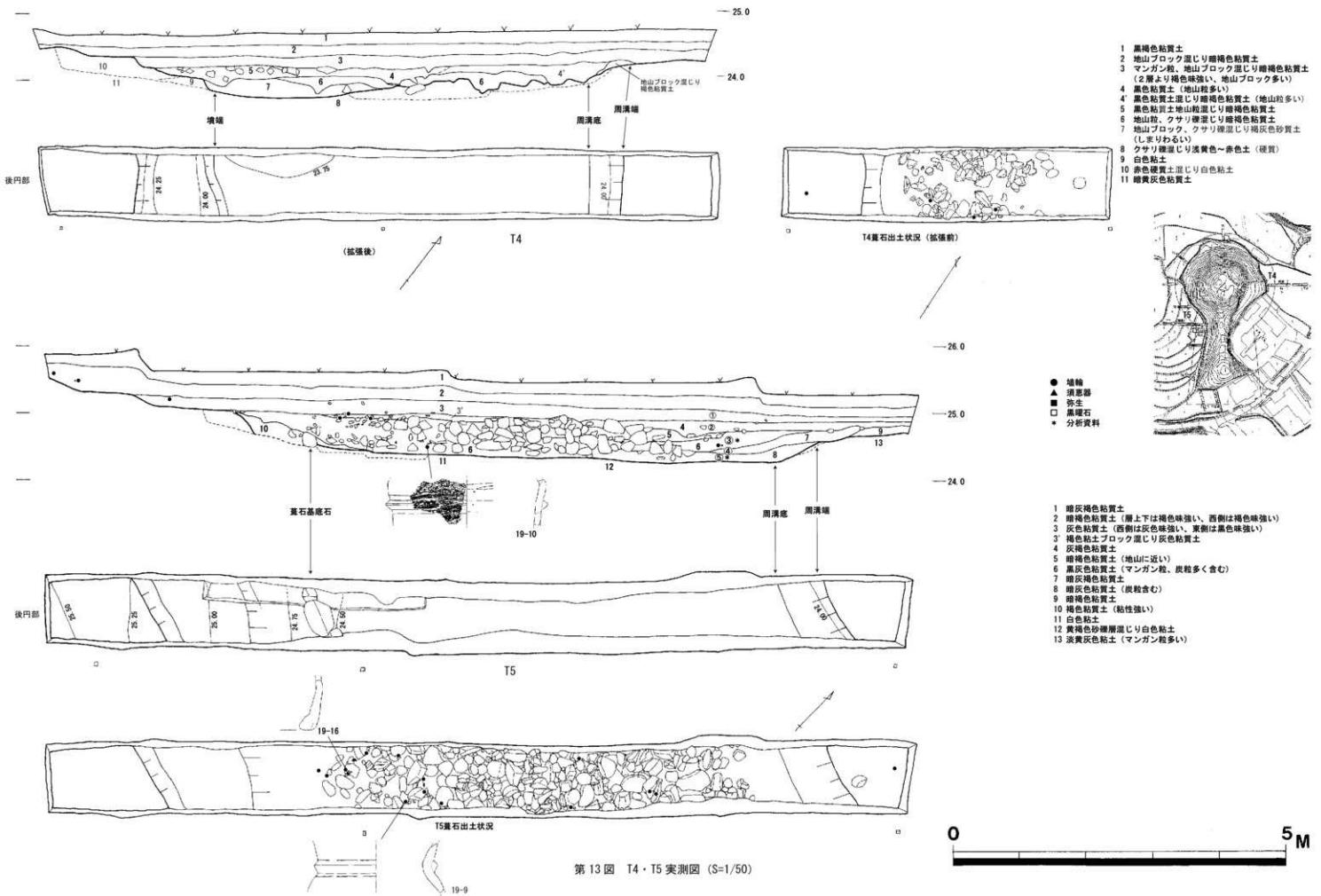
くびれ部西側に設定した $1m \times 13m$ の調査区である。現地標高は 25.9 ~ 25.3m である。現存くびれ部から約 4m 程までは地山面が緩やかに傾斜するが、途中から落ち込んで溝になる。また、20 ~ 50 cm 大の大石が並んで検出され、葺石の基底石と考えられる。段の下面の地山面に接しているため原位置と考えられる。基底石の裏側、古墳側の地山との間には褐色粘質土があり、墳丘盛土の可能性がある。溝の中には暗灰色系の粘質土と多量の石が確認され、石は 10 ~ 50cm ほどまでの大きさがみられる。石は溝の中央に多く、石の堆積幅も中央が厚い。これらの葺石は転落というより、人為的に溝内に集められた可能性がある。溝は底幅 6.8m・外側での深さ 0.3m（標高 24.3m）ほどになり、溝底面は白色粘質土と黄褐色の地山である。古墳側を中心に埴輪片が比較的多く出土したが、破片が多い。形のわかるものは少ないが、朝顔形埴輪（第 19 図・9、10）、普通円筒埴輪（第 19 図・16）がある。

T6 (第 14 図)

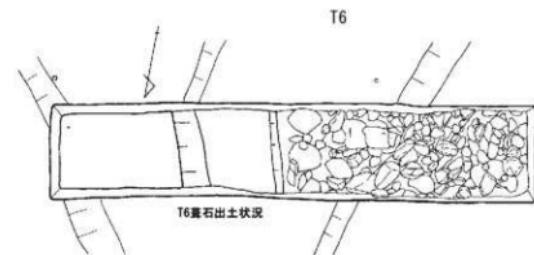
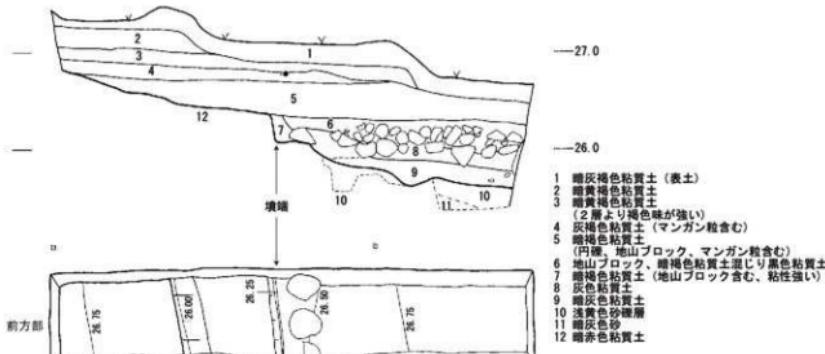
前方部西側に設定した $1m \times 5m$ の調査区である。前方部西側は植樹があるため墳丘主軸にあわせて調査区が設定できなかった。現地標高は 27.4 ~ 26.6m である。現存前方部から 1.5m 程までは地山面が緩やかに傾斜するが、途中から急激に落ち込み、暗灰色系の粘質土と多量の石が確認された。石は 10 ~ 40 cm ほどの大きさがみられる。段の下で埴輪の可能性のある 30 cm 程の石が並ぶように検出されたが、溝埋土上に半分程乗っており、若干動いていると思われるため、埴輪端は地山の段下場と考えられる。溝は幅 2.5m 以上・深さ 40cm（標高 25.6m）ほどになる。溝底面は黄色の砂疊層になる。遺物は上層より埴輪片が少量出土した。

T7 (第 14 図)

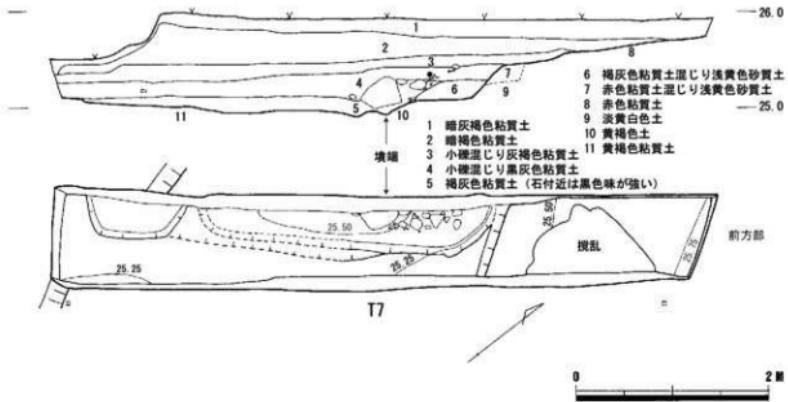
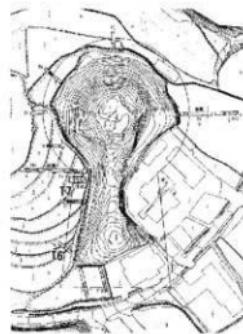
T5 と T6 の間に設定した $1m \times 5m$ の調査区である。現存前方部から 2m 程までは地山面が緩やかに傾斜するが、途中から急激に落ち込み、黒灰色系の粘質土と少量の石が確認された。石は 15 cm 前後と他の調査区に比べ小さくて少ない。段の下で埴輪の可能性のある 40 cm 程の石が検出されたが、地山面に接しておらず、若干動いていると思われる。溝底面は黄褐色粘質土の地山だが、基底石からみても非常に浅く、深さも 10 cm 程である。また、溝と見られる落込みは後円部側に浅い段が付いてやや深くなる。



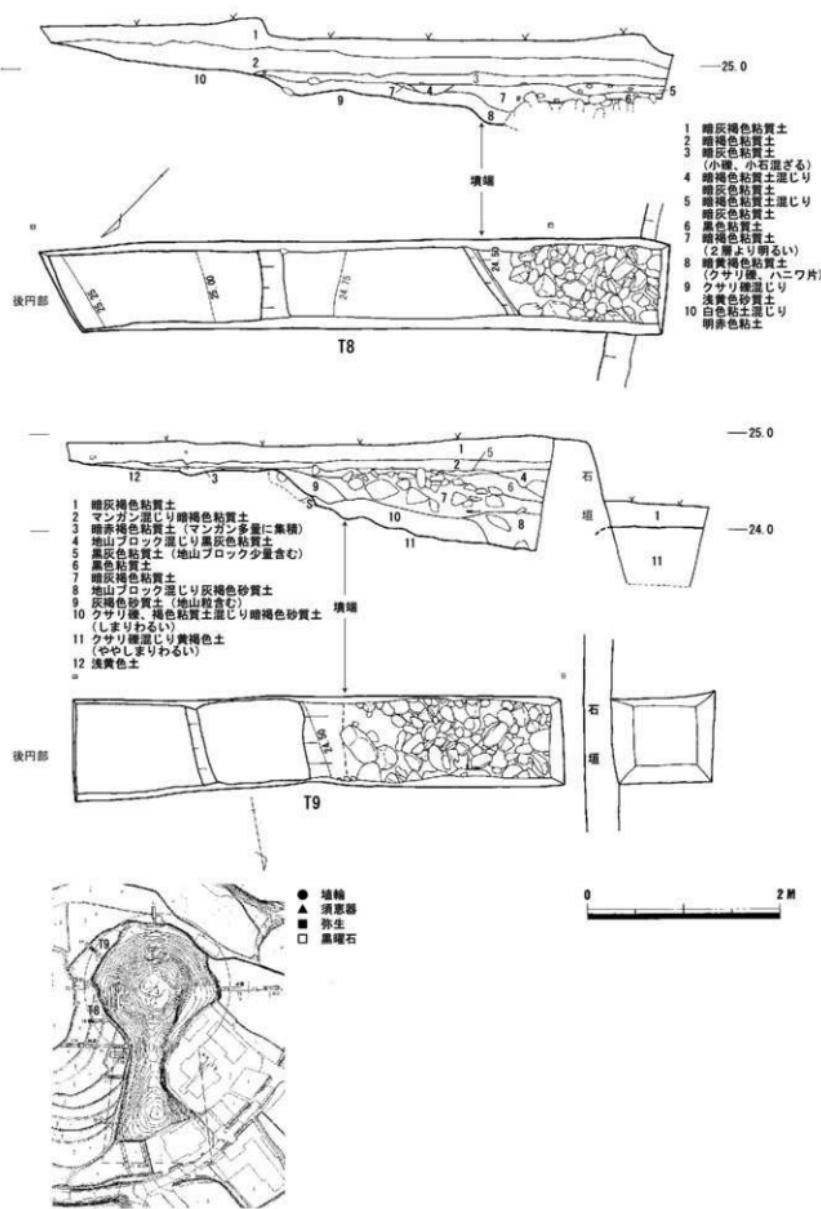
第13図 T4・T5実測図 (S=1/50)



● 塩輪
▲ 須恵器
■ 弁生
□ 黒曜石



第14図 T6・T7実測図 (S=1/50)



第15図 T8・T9実測図 (S=1/50)

T8 (第 15 図)

T2 と T5 の間に設定した $1m \times 5m$ の調査区である。墳丘から約 4.3m 離れた位置で溝埋土と考えられる暗灰色系の粘質土が確認され、調査区端で落込みが確認された。なお、転落葺石面の下部は未調査である。

T9 (第 15 図)

T2 と T3 の間に設定した $1m \times 5m$ の調査区である。外側には石垣が造られ約 60 cm の段ができるており、段の下にも $1m \times 1m$ の調査区を設定した。現存後円部から 2.3m 程離れて地山面が急激に落ち込み、10 ~ 30 cm 程の転落葺石が確認された。石垣下では地表下約 80 cm 程掘り下げたが、表土直下に地山の可能性がある黄褐色土があり、周溝の立ち上がりの可能性もある。なお、土層図は転落葺石面の一部を断ち割って作成している。

T10 (第 16 図)

くびれ部の状況を確認するため、T5 の横に設定した $2m \times 5m$ の調査区である。現地標高は 25.9 ~ 25.6m である。古墳側から約 7m 程までは地山面が緩やかに傾斜するが、途中から暗灰色系の粘質土と多量の転落葺石が確認された。石は 10 ~ 30 cm ほどの大きさがみられ、約 304 個あった。周溝の底は調査した一番深いところで 24.5m になる。転落した石をはずしたところ、10 ~ 30 cm 大の石が列状に並んでいた。地山面に接していることから葺石の基底石と考えられる。T5 の基底石は調査区に対して斜め方向になっているのに対し、T10 の基底石は直線になっている。おそらく T5 の前方側の基底石あたりが後円部と前方部の境であるくびれ部にあたるのであろう。基底石の裏側には地山に近いが粘性が強く、やや暗い色の土が確認され、T5 と同様に墳丘盛土の可能性がある。

転落葺石の上面を中心には埴輪片が多く出土した。埴輪片には朝顔形埴輪の口縁部（第 20 図・26）や肩部（第 20 図・29、31、33）があり、弥生前期土器の底部（41）も見られる。

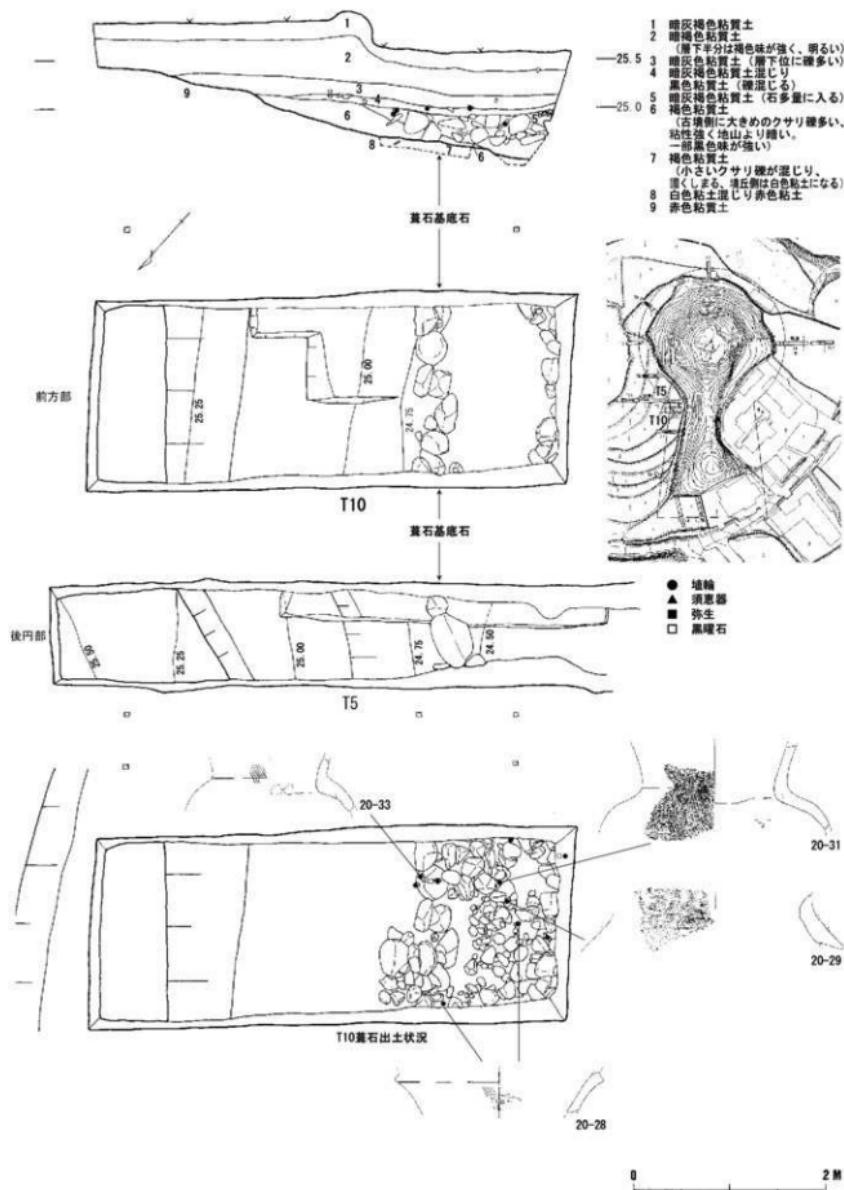
なお、転落葺石の出土する暗灰色系の粘質土より上層の暗褐色粘質土（第 16 図・2 層）より、中世の可能性のある土師器皿底部片（第 20 図・42）が出土しており、墳丘が削平された上限の時期の参考になる。

T11 (第 17 図)

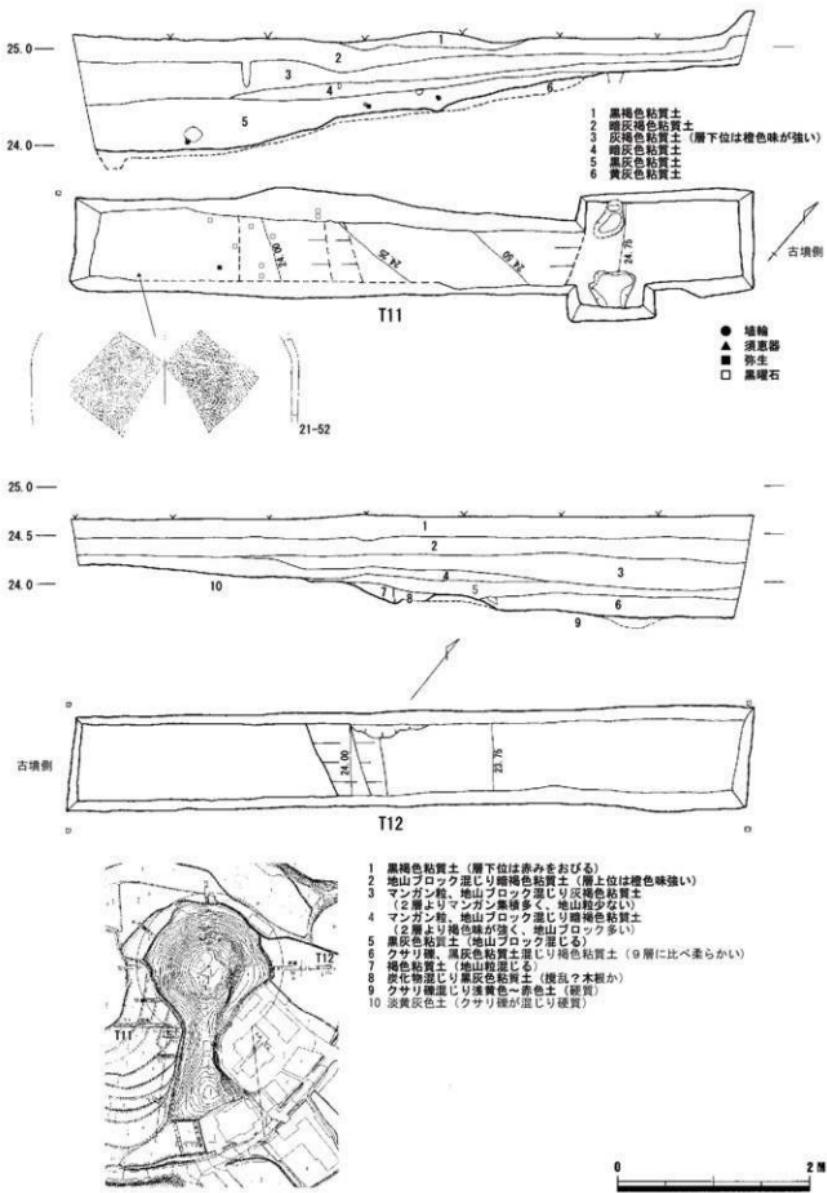
T5 で確認された周溝の外側の状況を確認するために T5 の西側に設定した $1m \times 7m$ の調査区である。現地標高は 25.1m である。古墳側から 1.5m 程までは地山面はほぼ水平で、不定形の穴も確認されたが、途中から傾斜して谷川へ向けて深くなる。地山面は調査した一番深いところで 23.9m になる。黒灰色粘質土が谷側へ向けて堆積しており、上位から少量の埴輪・須恵器（第 21 図・52）、下位から多量の弥生土器が出土した。安山岩の石礫や黒曜石も出土している。弥生土器は大半が前期と見られるが、小片になっているものが多い。なお、調査地の小字は「土器田」である。

T12 (第 17 図)

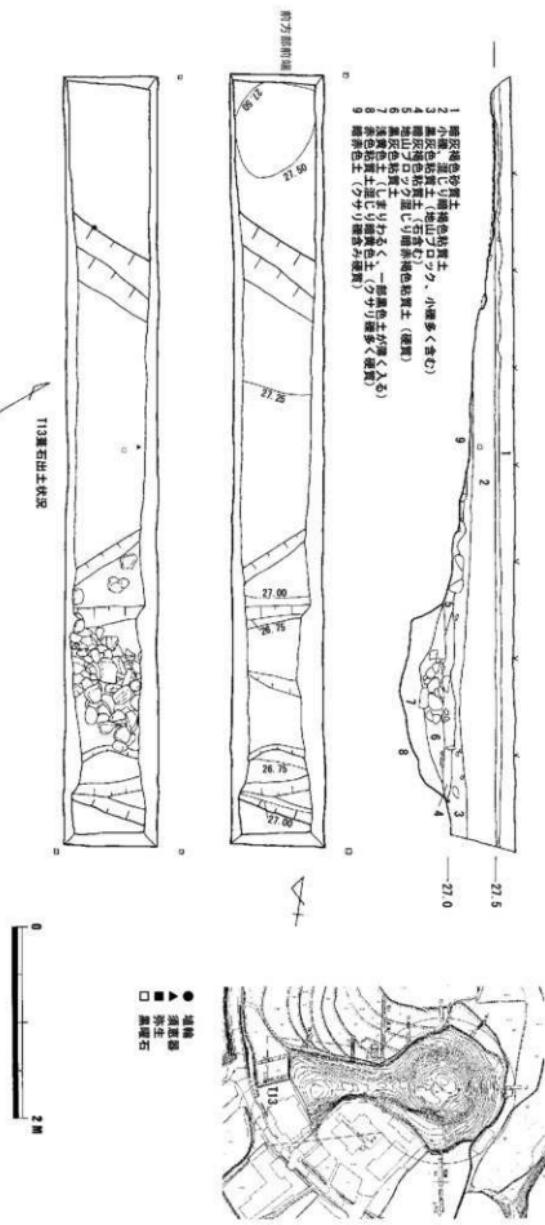
T4 で確認された周溝外側の状況を確認するために T4 の東側に設定した $1m \times 7m$ の調査区である。現地標高は 24.7m である。古墳側から 2.3m 程の場所からやや傾斜がきくなり、傾斜面には黒灰



第16図 T10 実測図 (S=1/50)



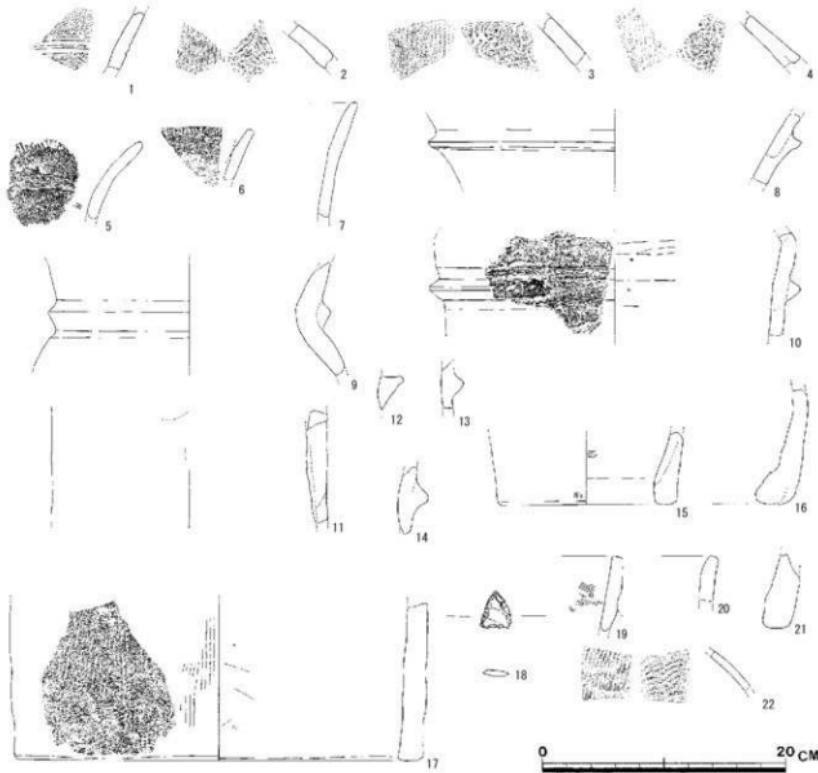
第18図 T13 美術団 (S=1/50)



色粘質土が一部堆積していた。地山面は深いところで標高23.64mになる。遺物は埴輪片や須恵器片、黒曜石片がごく少量出土したのみで、葺石のような石も確認されなかった。

T13 (第18図)

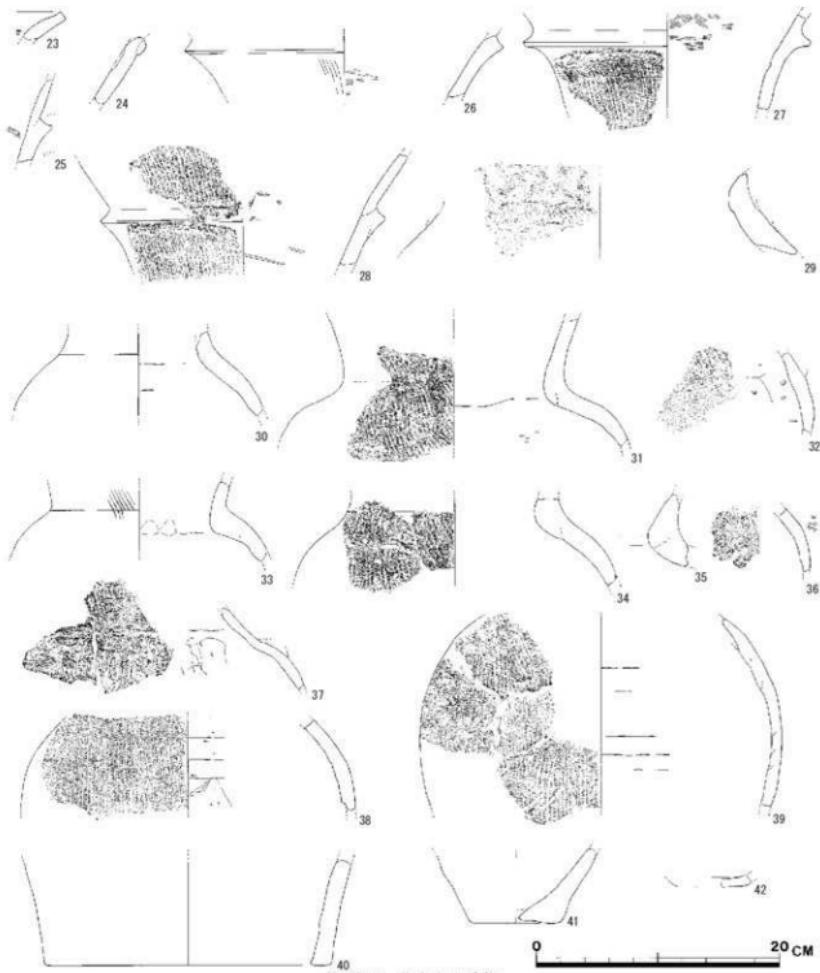
T1で確認された溝の続きを確認するため前方部前端の畑に設定した1m×8mの調査区である。現地標高は27.7mである。標高27.3m、現存前方部から5.8m離れた場所で幅2.15m・深さ約60cm(標高26.5m)の東西方向の溝を検出した。溝は二段掘状になり底はやや凹凸があり幅1.4mを測る。溝埋土には拳大から人頭大の石が約63個みられた。T1で確認された溝につながると考えられるが、現状では墳丘主軸には直交せず、規模も他の周溝に比べて小さい。



第19図 T2・T5・T7・T8・T9 出土遺物

第3節 遺物

埴輪は朝顔形と円筒のものがあり、特に周溝内の上位で破片が多く出土した。すべて土師質の焼成で、断面や外面の一部が黒い個体が目立つ。墳丘で表採されるものは褐色系の色調だが、周辺で出土する埴輪は淡黄褐色系のものが多く、容易に区別できる。周辺は周溝内に葺石が溜まっていたこともあり水が多く、長期間水に浸っていたためと考えられる。表面が摩滅しているため調整等観察しにくいものが多い。タガは断面が台形に近いものと丸みをもつものが混在している。また底部調整を行っておらず底部が潰れたままの状態で分厚くなっているものが多い。周溝の外側(T11)では弥生土器を中心に古墳以前の時代の遺物が出土し、古墳が造られる以前から人々に利用されていたことが判った。



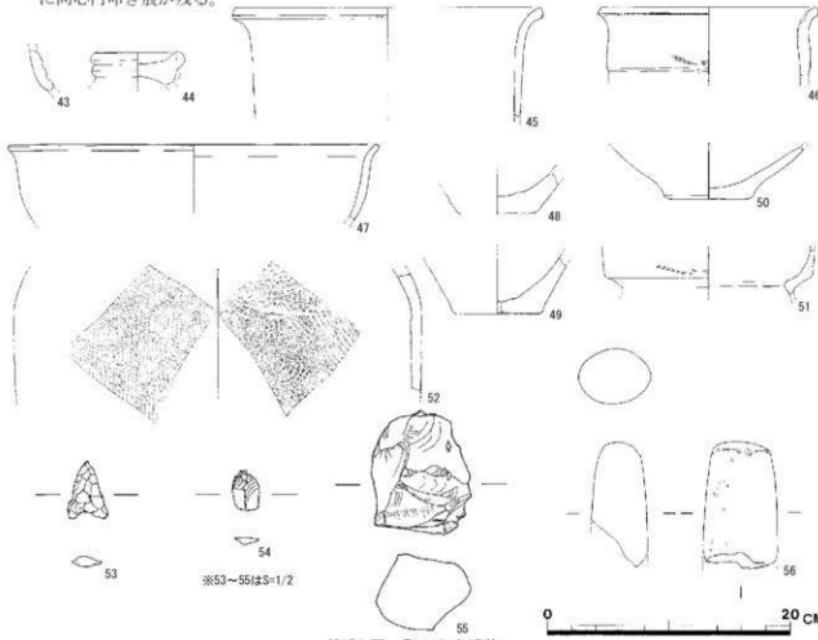
第20図 T10出土遺物

平成14年度調査（T1～T9）出土遺物（第19図・1～22）

(1～4)はT2出土の須恵器片である。墻端より外で見つかっており、古墳に伴う可能性は低い。(1)は甕の口縁部で外面に沈線3本と上下に波状文が入る。(2～4)は甕片で凸面に平行叩き痕、凹面に同心円叩き痕が残る。

(5～18)はT5出土で(18)以外は埴輪片である。周溝内に溜まった石の間から出土したもので原位置のものはない。(5・6)は端部内面に刻目をいれており、内面が黒色化して剥離したように見えるため、朝顔形埴輪の受部が接合部で剥離したと考えられる。(5)は内面下位に幅1mmの細かいヨコ～ナナメ方向のハケメが残る。(7)は円筒埴輪の端部である。(8～10)は朝顔形埴輪の口縁から肩部である。(9)は体部内面に絞目状の縦の線が入る。(10)は一次調整の幅1.5mmの細かいタテハケを施し、タガの接合位置をナデで凹ませた後に、タガを貼り付けて、ナデを施す。内面は横方向のケズリである。高さ1cmの断面三角形状のタガを貼付けている。(11)は胴部片で、破面の黒斑が途切れしており円形の透孔部分の可能性がある。(12～14)はタガ片である。タガの高さは0.8～1.8cmである。断面は、やや面をもち台形状のもの(12・14)と三角形状のもの(13)がある。(15～17)は底部片である。復元底径は13.8～33.2cmになるが、破片で底部が歪んでいると考えられるため、やや不正確な数値ではある。(17)は外面に幅3mm程の粗いタテハケ、内面はヘラケズリが施される。(18)は黒曜石の打製石器で周辺に細かい押圧剥離を行っている。

(19～20)はT7出土の埴輪片である。(19)は一段目のタガの剥離痕があり、端部から約4.1cm下がったところに1段目のタガが付くようである。内面に幅1mm程のナナメハケが施される。(21)はT8出土の底部片、(22)はT9出土の須恵器片で、外面に平行叩きのち横方向のカキメ、内面に同心円叩き痕が残る。



第21図 T11出土遺物

平成15年度調査（T 10～T 13）出土遺物（第20図・23～42、第21図・43～56）

(第20図・23～42)はT 10の出土で(23～40)が埴輪片、(41)が弥生土器、(42)が土師器皿底部である。(23～28)は朝顔形埴輪の口縁から受部である。(24)は一次調整のタテハケの上に丸みをもつタガを貼り付けており、破片で角度がやや不明瞭なため普通円筒埴輪の可能性もある。(25)は粘土帯の接合部を段にし、ナデ調整で断面三角形状の突帯を造り出している。外面には幅3mm程の粗いタテハケ、内面には幅1mm程の細かいナメハケを施している。(26・27)も同様に外面受部下位には幅3～3.5mm程の粗いタテハケ、内面には幅1～2mm程の細かいヨコハケを施している。(28)は接合部で剥離しており、突帯は粘土を貼付けて断面三角形状にしている。外面には幅4mm程の粗いタテハケ、内面には幅1mm程の細かいナメハケを施している。(29～37)は朝顔形埴輪の頸部から肩部・体部である。(29)は上側が接合部で剥離しており、外面に幅3mm程の粗いタテハケが施される。タガの下に一次調整のナメハケが残っており、さらに二次調整のタテハケを行っている。(30)は内面に凹凸があり、ヘラケズリの可能性がある。(31)は外面に幅3mm程の粗いタテハケ、内面は下位に横方向のヘラケズリを施す。(32)は上側にタガの剥離痕があり、一時調整の粗いタテハケが施されており、タガの接合によりハケメの上側が消えている。内面には横と下方向の粗いヘラケズリが施される。(33)は頸部に粗い幅3mmのタテハケ、内面の頸と体部の接合部には指オサエ痕が残る。(34)は体部に粗い幅3mmのタテハケが施され、内面はヘラケズリの可能性がある。(36)は埴輪としたが、土師器などの可能性もある。外面に渦巻き状模様が1箇所以上ある。(37)は上側にタガの剥離痕があり、一時調整の粗いタテハケが施されており、タガの接合によりハケメの上側が消えている。内面には横と下方向の粗いヘラケズリが施される。(38)は体部外面に粗い幅3～4mmの一次調整のタテハケがあり、上側はナデでハケメ上端が消えている。内面は下半部に下から、上側に横からのヘラケズリが施される。下からのケズリのヘラの終点が器壁にくい込んでいる。

(39)は朝顔形埴輪の肩部から体部と見られるが、他の破片に比べて丸みが強い。内面に粘土積み上げ痕跡が残り、幅1.5cm程の粘土紐を積み上げて造っているようである。体部外面に粗い幅3～4mmのタテハケ、内面は粘土積み上げ痕を粗くナデ消している。(40)は底部片で外面はタテハケ、内面は凹凸がありケズリ調整に見える。(41)は弥生土器の底部で、2mm大の砂粒を多く含み、底は分厚い。風化のため調整は不明である。(42)は土師器皿で底径5.4cmを測る。底部に糸切痕らしき線が残り、内面はロクロナデである。

(第21図・43～56)はT 11からの出土である。(43～51)は弥生土器である。(43)は風化が激しいが、幅広の凹線が2本以上あり、壺類の頸部の可能性がある。(44)はおそらく甕の蓋でつまみ部分は貼付で2段の突帯を造っている。(45・46)は弥生時代前期の甕片である。(45)は全体に摩滅しているが、口縁下端部に刻み目を入れている。胴部は直線的で膨らみがない。(46)も同様に口縁下端部に刻み目を入れ、外面にハケによる浅い段をつける。(47)は鉢と考えられるが、調整は不明瞭である。(48～50)は底部片だが分厚いもの(48・49)とやや薄く体部の広がりが大きいもの(50)がある。(51)は弥生時代後期の甕口縁で外面に凹線が少し残る。(52)は須恵器片で外面は平行叩きのちカキメとナデ、内面は同心円叩きを一部ナデ消している。(53)は安山岩の打製石礫で先端と縁に細かい押圧剥離を行っているが、裏面は細かな剥離面がやや少ない。(54)は淡灰色の黒曜石片で、姫島産と見られる。端部に細かい欠損があり、使用痕のある剥片である。(55)

は黒曜石の石核である。一部に礫面を残すが、大半が剥離を行っている。剥離面には大きい曲線面と、やや小さい直線的な面がある。(56) は磨製石斧の基部で全体的に研磨されているが、片面には敲打痕が残る。

調査区から出土した遺物の総破片数を第2表に示している。弥生土器は摩滅したものが多く、一部繩文土器や古墳時代土器を含む可能性もあるが、区分できないため一括している。もっとも埴輪片が出土するのはくびれ部周辺(T5・T10)で、周溝がしっかり造られている位置と対応する。弥生土器は特に周溝外側の谷(T11)で出土している。須恵器は全体的に出土するが、細片のため時期は特定できない。古墳築造後も人の出入りがあった可能性がある。

葺石

各調査区からは多くの石が出土し、墳丘裾を削った際の葺石と考えられた。転落したものが多いと見られるが、人工的に周溝内にまとめて棄てた可能性のある調査区(T5)もある。

石の種類は花崗岩・花崗閃綠岩・花崗斑岩・凝灰角礫岩・硬質片岩・石英閃綠岩・流紋岩・泥質片岩・霞石玄武岩などがみられ、花崗岩系(約6割)・流紋岩系(約3割)の石が多い。花崗岩系の石には風化したものが多く、基本的に山石である。葺石の総数はカウントしなかったが、全体の約6割が山石、約4割が周布川流域の河石と見られる。なお、墳丘には中～小型の河原石が目立つ。

注目されるのは、T5出土の葺石には周辺に見られない黄長石霞石玄武岩が1点含まれていたことである。この石は古墳から周布川を挟んだ東側の丘陵一帯(現在の浜田カントリークラブ周辺)にあり、現在は島根県天然記念物に指定されている(浜田市教育委員会2002a)。現在の墳丘で観察できる葺石には中～小型の河原石が見られ、周布川から運び上げたと想定できるが、それを傍証したことになる。

また、今回の調査で出土した葺石は現在の墳丘で観察できる葺石に比べ、大きいものが多い印象を受ける。本来、削平された墳丘の1段目斜面に葺石があった場合、上方の斜面に比べ大きい石を並べていた可能性がある。ただし、上方の大きな石も併せて外したり、石の自重で転落し易かったなどの想定もできるため断言はできない。現状では調査で葺石が大量に見つかった調査区もあれば、あまりない調査区もあり、周溝の深さと残存状況による差と考えられる。後円部北側(T3とT4の間)には、現在残る墳丘斜面に葺石と見られる大き目の石が石垣状に貼り付けられている。

なお、前方部前端の市道沿いの水路に用いられている石はめんぐろ古墳の石室の石と聞いており、特に前方部側は周辺の石が周布古墳の葺石とは限らないようである。

調査区	埴輪片	タガ	端部	底部	透孔	朝顔形	黒曜石	弥生	須恵器	磁器	石器	合計
T1	1	1					2		2	2		8
T2	4		1				1	1	5	1		13
T3	5											5
T4	10				1				1			12
T5	365	18	10	6		16	2	19	1	3		440
T6	9		2	1			1	1	1	1		16
T7	40	4	2		1				2	2		51
T8	20	1		1					1			23
T9	6					1			1			8
T10	432	15	5	1	1	22			5	1		482
T11	7						19	443	2	2	2	475
T12	4							1	2	2	2	11
T13	11							1				12
合計	914	39	20	10	2	39	27	473	19	11	2	1556

第2表 周布古墳出土遺物集計表

第4章 蔵地宅後古墳の確認調査

第1節 遺跡の概要

調査地は浜田市津摩町の集落に面した北西側の丘陵先端に位置する。残存丘陵の頂部は標高12,943mである。昭和57年の市道工事により北西から延びる丘陵が分断され、現在は古墳のある丘陵先端部が独立している。それまで祠と石材の周辺まで北西から続く丘陵は畠であったと聞いている。現在は丘陵を取り囲むように宅地が近接しているが、東半分側の家が古くからあるとのことである。現在も南側75m程で海になり、津摩漁港がある。海との関連性を思わせる立地である。

古墳の横には隣接する4世帯で祀る祠が置かれ「もりがみさん」と呼ばれている。以前より知られていた古墳で、石材が露出している。これまで箱式石棺（島根県教育委員会1985）、横穴式石室（浜田高校歴史部・大谷1995）とされてきた。石室の特徴として、板状の石材を腰石に使用し、九州系譜の石室との関連性も指摘されている（浜田高校歴史部・大谷1995）。

これまで須恵器の蓋3（第26図1・2・5）・杯1（4）・短頸壺1（6）が紹介されていた（島根県教育委員会1985）。その後1991年に石室周辺で杯1（3）・台付椀の杯部片（7）が石室周辺から採取された。明治初年に刀剣を出土したとも伝えられている。

第2節 調査の概要（第23図）

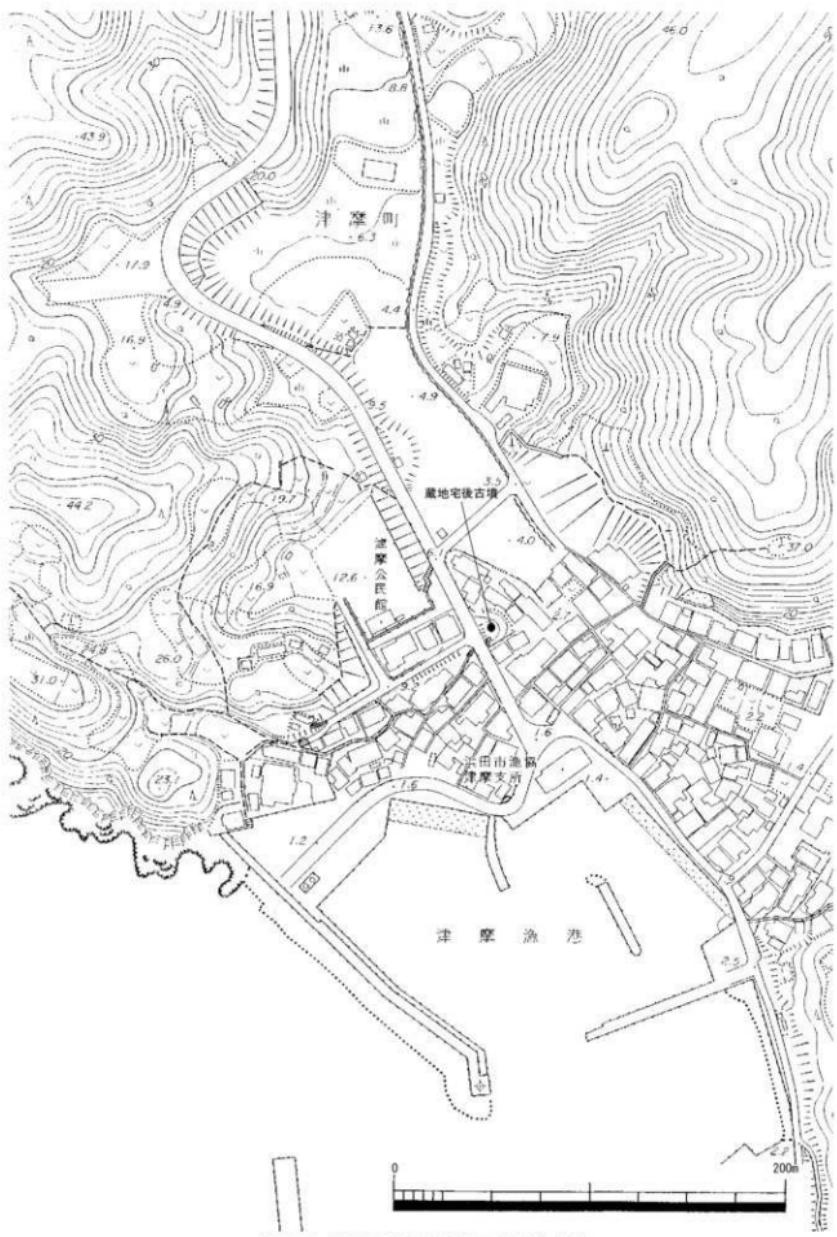
調査前の石材は、元位置にあるものは北方向へL字状のやや大きめな板状の石が2列、東方向に石が2段見られた。石棺あるいは北側に開く横穴式石室と予測された。周辺の崖は大きく崩落し、北側では石材が崖下まで転落していた。現在残存する旧地形は東西約11m・南北3m程である。昭和48年の島根県埋蔵文化財包蔵地調査カードでは□状に略図が描かれていた。おそらく、ある時期に崖面が崩壊し北側の側壁が1枚転落したと見られる。調査結果と併せて、東側に開口する横穴式石室であることが判明した。

石室と墳丘の残存状況を確認するために周辺の地形測量を行い、5つの調査区（T1～T5）を設定した。測量結果からみると、周辺は宅地と道路により削平されており、墳丘の手がかりになる地形はほとんど確認できない。祠へあがる道の部分が平坦になっており、祠の古いコンクリート基礎が祠の東側（T4とT5の間）に残っていた。元は下から上がる道沿いにあったものを現状の斜面上に移したと考えられる。祠の北西側には元の丘陵の畠と見られる平坦面が残っている。下の宅地と石室石材との比高差は約6.5mである。

T1 (1.68 m²)

墳丘西側の残存状況を確認するために石室西側（奥壁後側の平坦面）に設定した。現地表下約0.6mで調査区の中央より西側で黒色土の堆積する落込み（幅1.5m以上・深さ10.5cm）を確認した。古墳の周溝の可能性があり、底は西側に緩やかに高くなる。西側の溝端は崖面のため確認できなかつた。また、溝は奥壁から約2.8m離れ、奥壁と平行しない。

黒色土より上にはT2側の地山一部掘り込むように硬質な暗褐色土と灰褐色土が厚く堆積している。灰褐色土中には焼土面もあり、古墳が壊された以降も周辺が畠などに使用されていた可能性がある。



第22図 藏地宅後古墳周辺図 (S=1/2,500)

T 2 (0.36 m²)

石室掘形を確認するために石室の西側に隣接して設定した。奥壁掘形は石材から約30～55cm離れた位置で確認された。掘形は2段になっているが、上はやや浅い掘り込み状になる。下場は奥壁との間隔が狭く底は確認できなかった。

T 3 (0.7m × 0.5m・0.35 m²)

石室内の残存状況を確認するため、石室の南西隅に設定した。黒褐色の軟らかい腐植土が約40cm堆積しており、須恵器の杯（第26図・3と接合）・台付椀（7・調査前出土遺物と接合）・小型杯（8）・壺類口縁部（9）・提瓶（10）・鉄片（11・12）などが破片の状態で出土した。黒褐色土からはスリッパ、釘、ヤスリなど現代製品も見つかり、須恵器片の中には以前採取されていた破片と接合するものもあった。近年、奥壁側が掘り返されたと考えられる。黒褐色土の下は地山に近い浅黄色土で、石室床面に近いと考えられる。この面は石材の組み合う南西隅が高く、黒褐色土は北東側へ厚く堆積している。

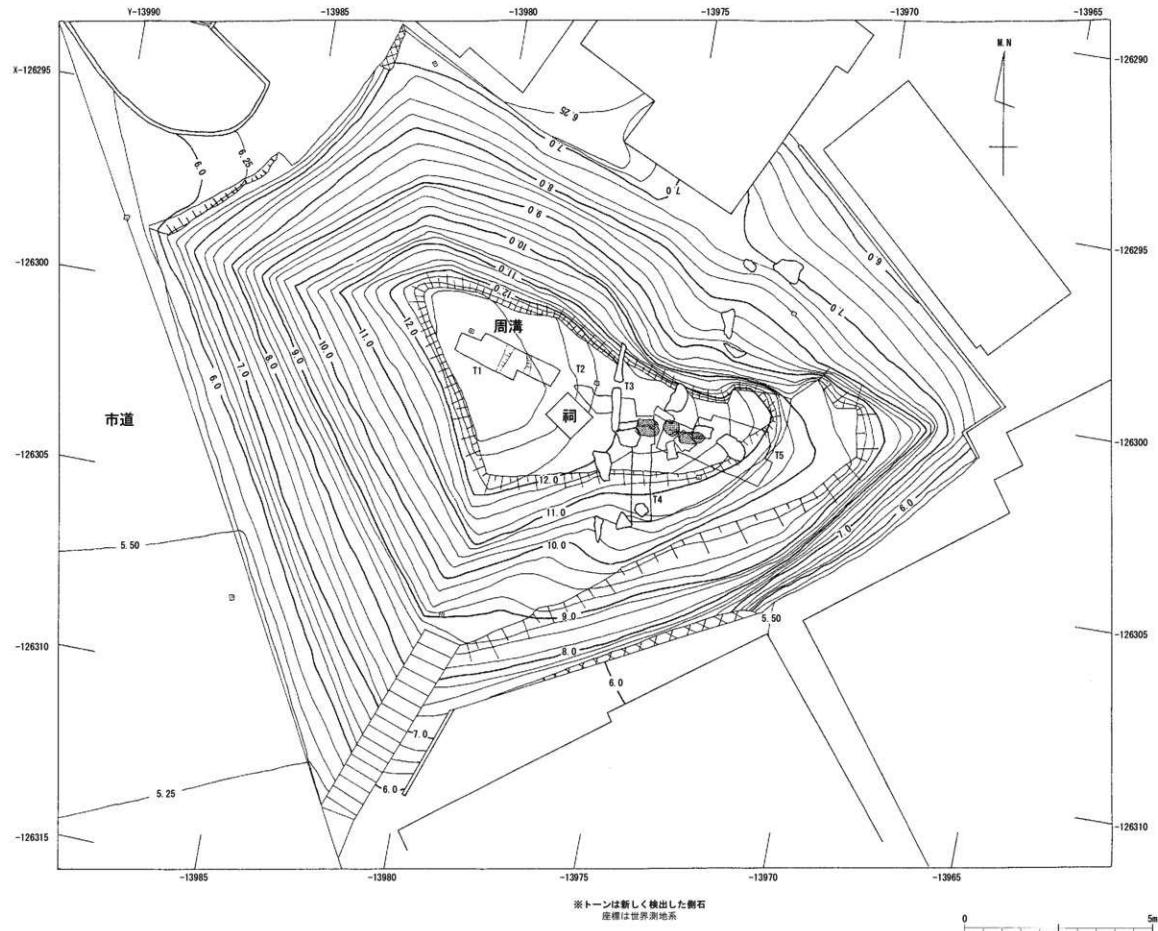
T 4 (0.5 × 2m・1 m²)

石室掘形と墳丘南側の残存状況を確認するため、石室の南側斜面に設定した。外側掘形は想定場所に他の転落石材があったため、充分に確認できなかった。地山面は木の根による腐植と調査前から一部露出していたため黒色土が入って軟らかく、地山面の判断が困難であった。古墳の盛土の可能性もあったが、下のしっかりした地山は面的に検出できなかったため、元々は同一と判断した。石室から約4.5m離れた位置から急激に落ち込んでいる。

T 5 (0.7 × 2.7m・1.89 m²)

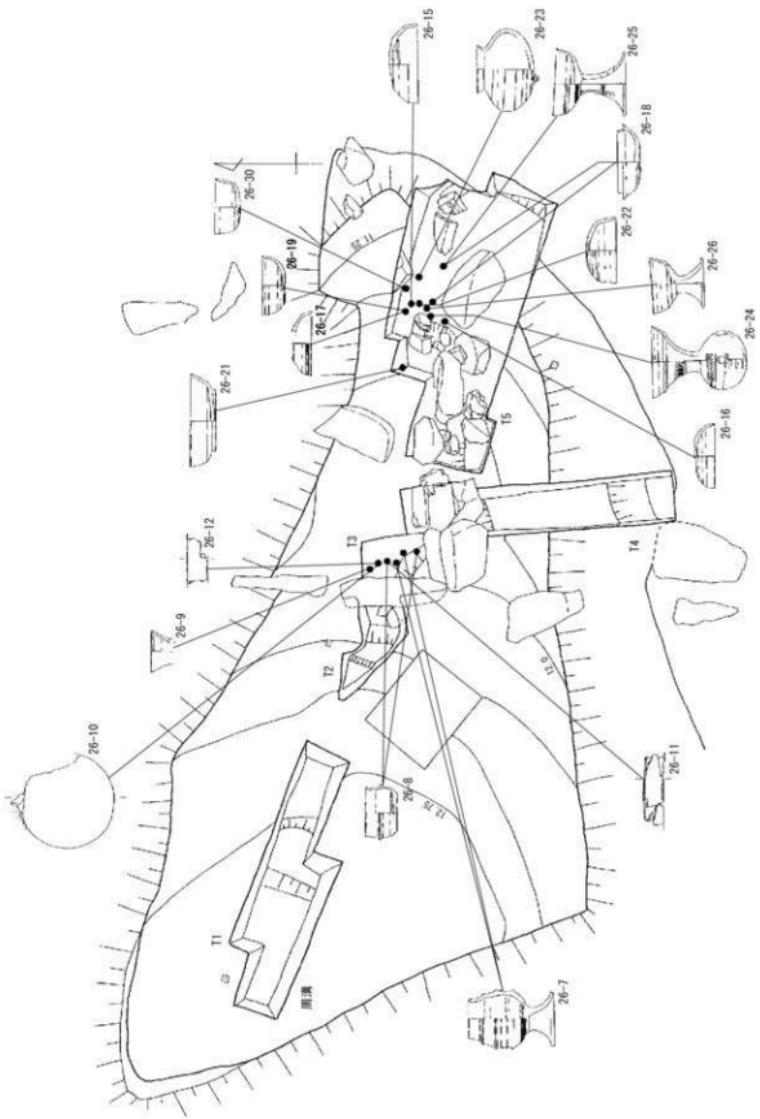
石室東側の残存状況を確認するため、石室の東側に設定した。南側に側壁と考えられる石列が確認され、石室主軸は東西方向であることが判明した。T5で側壁の石は2個確認され、奥壁から側壁の石が4列立っていると考えられる。なお、先端の石は外側へ傾いていた。側壁の外側掘形は石材から約30cm離れた位置で確認できた。掘形の埋土は地山ブロックの混じる暗褐色土で、地山より暗い色調で硬い。地山面は木の根による腐植が激しく、明確な面はかなり掘り下げないと判断できなかったが、調査区の東端から急傾斜しており、先端部は既に崩落していると考えられる。側壁の続きを確認するため北側（崖面側）へ拡張したが、側壁や側壁の据付痕跡は確認できなかった。しかし、表土下の搅乱土から須恵器が比較的良好な状況で見つかった。石室中央の地山面からかなり浮いた状態で散発的に蓋（16・17）、高台の付く杯（21）が見つかり、漢道側で須恵器蓋（15）、杯（19・20）、短頸壺と蓋（22・23）、壺（24）、高杯（26）が完形に近い状態でみつかった。さらに東側では破片の状態で杯（18）、高杯（25）が見つかった。これらは比較的まとまっており地山面に近いが、残存する側石より外側で原位置でない可能性がある。

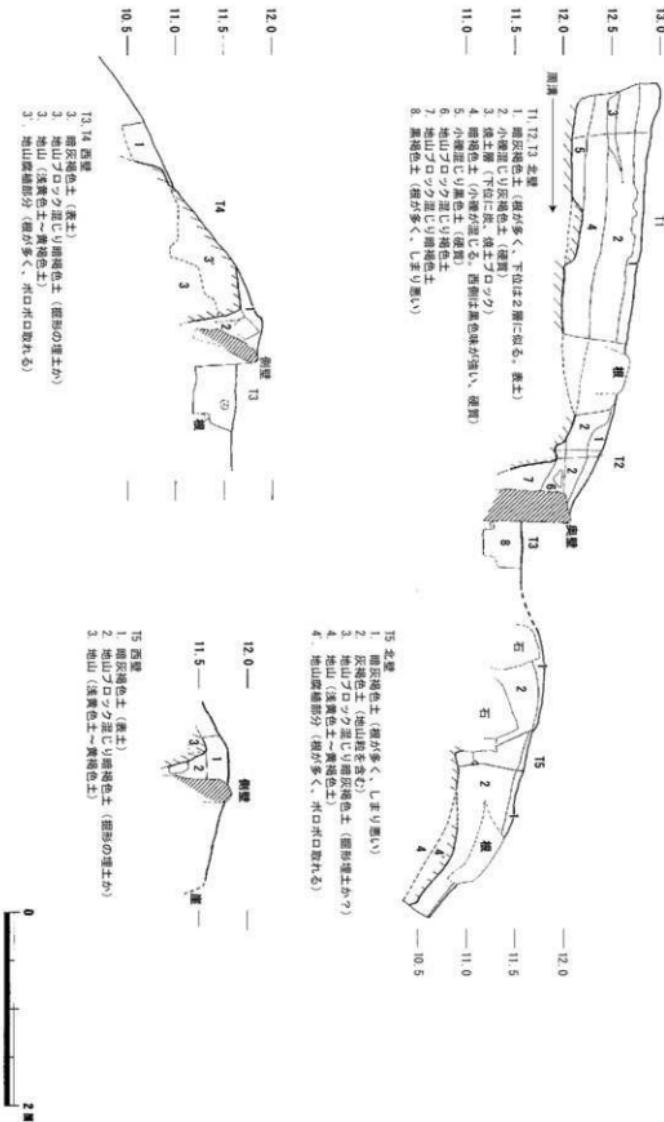
調査の結果、横穴式石室は奥壁の幅約2m・長さ2.3m以上で東に開口し、漢道と床面の半分は崩落している。墳丘は削平・流出しているため断定はできないが、現在残る丘陵部が最大10m程あり、周溝が石室奥壁に平行しないことから、径10m前後の円墳と想定される。



第23図 藏地宅後古墳 測量図 (S=1/100)

第24図 横穴式石室 遺物出土状況 (S=1/50)





第25図 調査区土層図 (S=1/50)

石室に用いられていた石材は、奥壁が流紋岩質凝灰岩、奥壁側の側石が流紋岩（古墳南東側の専称寺のある丘陵一帯に分布）と、この2種類が多い。その他、少量の安山岩（古墳北西側の津摩公園北側一帯に分布）が見られる。主に現在の津摩集落のある海側からの石で石室を造っている。また、丘陵の地山には花崗岩の貫入がみられる。また、側石の流紋岩質凝灰岩には円形の風化痕が見られ、もともと露出していた自然石を一部加工して用いている。

第3節 遺物

表採品と併せて須恵器蓋・杯5・短頭壺2・短頭壺蓋1・提瓶1・罐1・高杯2・台付椀1・小型杯1・鉄刀2片・不明鉄製品が出土した。

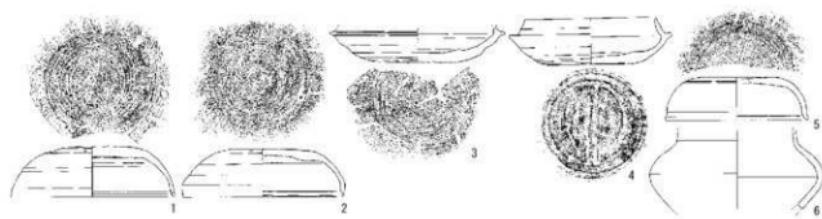
調査以前から石室周辺で須恵器が採取されており、今回の調査の出土品と接合するものもあった。特に須恵器台付椀は1991年に杯部の破片が1点採取され、今回の調査で接合する破片が2点出土し、その後脚部が見つかっている。

出土遺物（第26図・1～27）

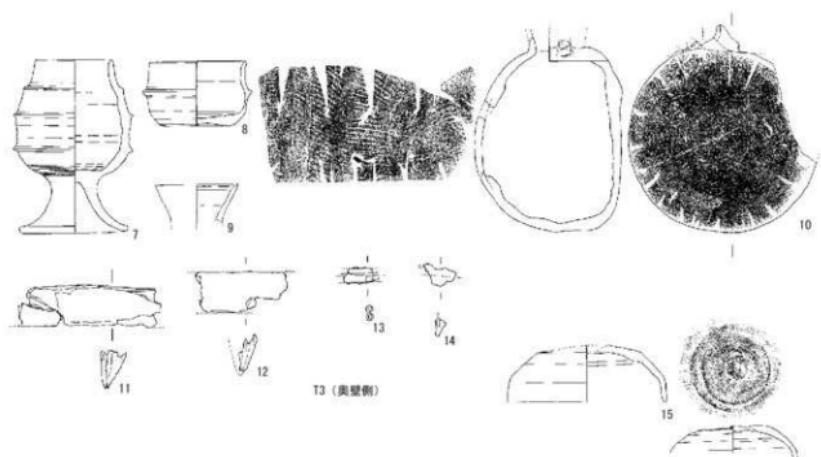
(1～6)は調査以前に石室周辺で採取された須恵器である。T3出土の破片と接合することから、石室の奥壁側の出土と考えられる。(1・2)は蓋で、いずれも天井部は2周以上のやや粗い回転ヘラケズリ、内面はクロナデが施される。口縁端部内面は(1)は端部からやや上がった位置に沈線状のナデ、(2)は端部近くに沈線状のナデをいれていずれも段状に仕上げている。(3・4)は杯で、底部は(3)が3周以上の全面ヘラケズリ、(4)は板状圧痕が残り周辺に2周以上の回転ヘラケズリを施している。これらの蓋杯は暗灰色でやや焼成が悪い。(5)は高杯の蓋の可能性がある。天井部は回転ヘラケズリ、カキメ、浅い板状圧痕、「×」字ヘラ記号を施す。口縁端部はやや外反する。色調は灰色である。(6)は短頭壺で肩部と下半部の破片である。

(7～14)はT1(石室内奥壁側)出土で、破片になっているものが多い。(7)は台付椀で口径6.1cm・底径8.3cm・器高14.2cmである。胎土は0.5～1mm大の白色粒を少量含む。外面には黒灰色の自然釉がかかり、(8)以外の他の須恵器とは焼成が異なる。杯の端部はやや内傾する。体部に3条のつまみ出し突帯をつくる。突帯は高さ3mmで断面三角形である。杯部と脚部の接合部には外面にカキメが施される。(8)は小型杯で口径7.8cm・底径5.1cm・器高5.3cmである。(7)の台付椀と同様の自然釉・焼成とつくりである。底部はヘラ切りで、周辺を3単位ほど小さく削っている。体部の器壁は薄く、断面三角形のつまみだし突帯を1条つくる。蓋の可能性もあるが、底部が未調整に近いこと、体部の器壁が薄いことから、杯と考えられる。(9)は壺類の口縁で(10)の提瓶の口縁の可能性もあるが、接合しない。(10)は提瓶で残存縦幅17cm・横幅15.5cm・器高12.6cmである。まず扁平な下半部を叩き調整でつくっており、内面には当具痕と指跡が残る。体部成型後に口縁部を造って天井部を粘土円盤でふさぎ、全体をカキメ・ナデ調整している。天井をふさいだ粘土円盤には外側から1箇所貫通しない刺突がある。環状の耳跡が残るが穴の幅が狭く、吊るすなど実用的な環ではないと考えられる。(11・12)は鉄刀で断面三角形状の直刀である。(11)は残存長11.7cm・幅4cm・厚さ2.2cm、(12)は残存長7.6cm・幅3.4cm・厚さ1.5cm以上である。同一個体かは断定できなかった。(13・14)は断面方形の鉄棒で、(13)は1辺0.2～0.4cm・長さ3cm以上、(14)は1辺0.2～0.5cm・長さ2.6cm以上である。古墳に伴う遺物かは不明である。

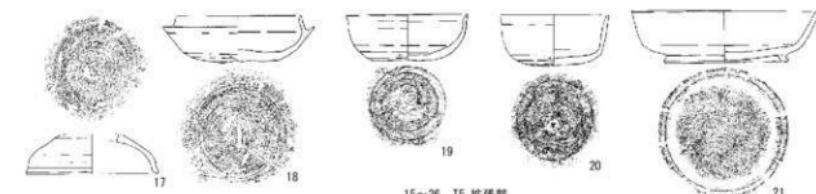
(15～27)はT5の石室内漢道側の出土である。(15)は焼成が悪い土師質の須恵器蓋である。(16)



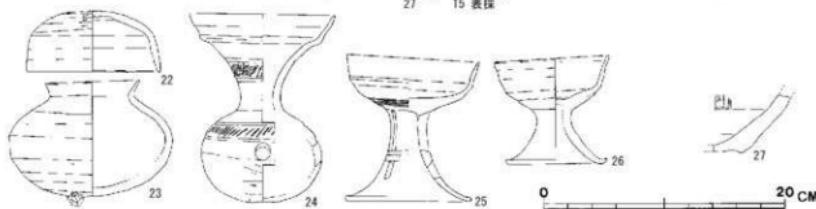
調査以前表探遺物（奥壁周辺か）



T3 (奥壁側)



15~26 T5 技工部
表探



0 20 CM

第26図 出土遺物

はやや小型の蓋で天井部はヘラ切り未調整である。天井部に一部板状の圧痕が残り、切離し後、一時的に作業台などの上においてた可能性がある。(17) も小型の蓋で口縁端部はやや外反する。(18 ~ 21) は杯で、受部が付くもの(18)と口径の小さい椀状で体部が丸みを持ち口縁が外反するものの(19)・直線的なもの(20)、高台がつき口径が大きく器高が低いもの(21)がある。なお、(20)は短頸壺の蓋の可能性もある。(18)の底部は薄く板状圧痕が残り、周辺にヘラケズリを2~3周施す。(19・20)の底部は単位の明瞭な回転ヘラケズリを3~4周施す。(21)は薄く板状圧痕が残り、外反する高台を貼り付けている。体部は屈折して立ち上がる。(22)は短頸壺の蓋で天井部が丸いこと、(23)の短頸壺の肩部の重焼痕と径が合致することから判断した。他の杯に比べ器壁が厚く、天井部は全面回転ヘラケズリである。(23)は短頸壺で、底部に焼成時の釉着物があるため正立しない。器壁の薄い口縁部を造り、体部外面下半は回転ヘラケズリである。底部内面には板状圧痕が残り、内面はナデで調整される。(24)は腹で復元口径11.9cm、体部径9.8cm、器高15.5cm、頸部高7.9cmで頸部と体部はほぼ同じ高さである。頸部と体部には、沈線2本の間に板状工具による列点文が施される。体部下半はヘラケズリのちナデを施す。(25・26)は高杯で、器高が高く脚部に3方向2段の透かし穴をいれるもの(25)と無文で小型のもの(26)がある。(25)は杯と脚の接合部外面にカキメを施す。(26)の小型高杯は杯部の接合があまく、外面に接合痕が残る。

(27)はT5で表採された備前系陶器の摺鉢で、内面は8本以上の摺目が残り、摩滅している。底部は凹凸があり未調整である。

第5章 金田1号墳の確認調査

第1節 歴史的環境と周辺の遺跡

金田1号墳の周辺は北西に下府川とその支流の金田川があり、比較的平地の多い場所である。

古墳時代以前と考えられる遺物は下長屋の水佐古門遺跡で打製石斧が採取されている。この遺跡からは須恵器片も採取されており、周辺の古墳との関係もうかがえる。古墳は比較的多く確認されており、既にその概要がまとめられている（金城町教育委員会 1983）。出土品はいずれも浜田市金城歴史民俗資料館に保管されている。これらの古墳は石材がみられ、主体部は横穴式石室が大半と考えられる。後述する下長屋古墳・猿ヶ馬場古墳のほかには、今福古墳、山側に溝をつくり横穴式石室をもつ円墳である火塚平古墳がある。周辺には製鉄遺跡（鍛冶場・鉄穴場など）、石見焼の瓦窯跡などが少数見られる（金城町教育委員会 1986・1987、金城町 2003）。

下長屋古墳（第28図・1～12）

宅地造成で消滅したが、須恵器が出土している。高さ約1.3m・径約4m程の墳丘があり、墳頂に石が散乱していたため横穴式石室があったと考えられている。

出土遺物

須恵器は蓋5、杯6、把手付椀1がある。蓋杯は（10）の杯以外は天井部と底部に板状圧痕を残すいわゆる「石見型」須恵器だが、圧痕は浅い。板状圧痕が幅1mm程の細かいものが蓋、幅3mm程の粗いものが杯と使い分けられているようである。暗灰色～暗青灰色を呈し、蓋杯は天井部と底部の調整から以下のとおり分けられる。

蓋（1～4・12）

- ・天井部に幅1mmの細い浅い板状圧痕の後に周辺に回転ヘラケズリを1～2周行うもの（1～3・12）
　口径は13.8～14.7cmである。口縁端部はやや外反するものがある（2）。
- ・内面にかえりの付く蓋（4）。天井部は回転ヘラケズリとナデが施されており、つまみがついていた可能性がある。かえりの接地面は口径10.5cmである。

杯（5～10）

- すべて、たちあがりと受部のつくもので、かえりの付く蓋（4）と組み合う杯はない。
- ・天井部に幅3～4mmの幅広の浅い板状圧痕の後に周辺を回転ヘラケズリ（1～2周）を行う（5・6・8・9）。その後ナデ調整で底部が丸みをもつものもある。たちあがりの上端の口径は11.8～13.6cmである。
- ・前述の板状圧痕を残すのみでケズリ調整を行わないもの（7）。
- ・ヘラ切り後、周辺に回転ヘラケズリを1周行い、ナデ調整を行うもの。底部に「↑」状のヘラ描きがある（10）。

把手付椀（11）

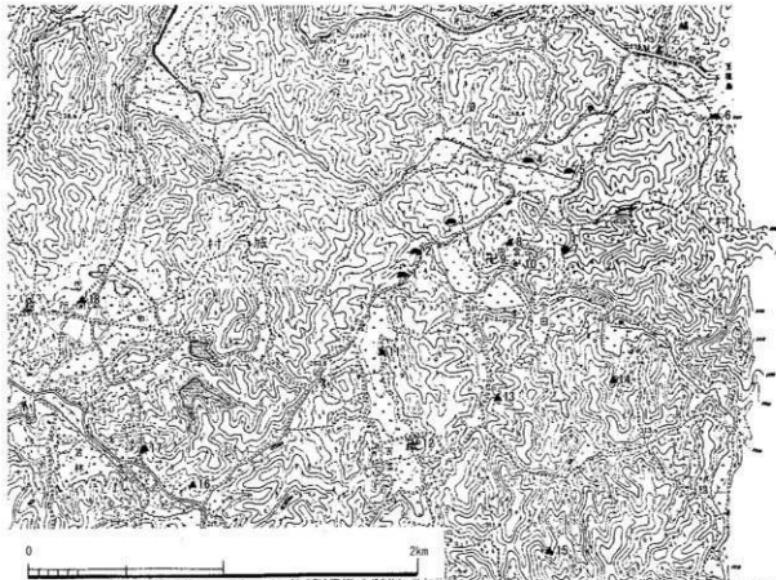
焼成が他の蓋杯と異なり、青灰色で硬質な焼き上がりである。底部は丸底で口縁端部はやや外反する。底部外面はヘラケズリのうちに横方向のカキメを施す。把手はケズリで方形に仕上げた後ナデ調整を行っている。

猿ヶ馬場古墳（第28図・13）

昭和38年の畠地造成の際に須恵器が出土している。造成中に石が多く出土しており、横穴式石

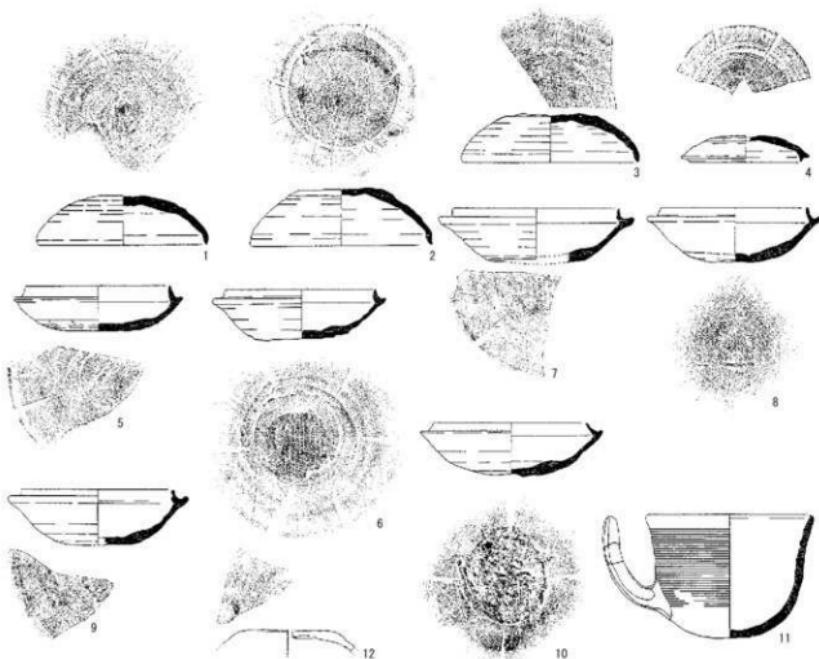


平成11年発行 番号は第3表に対応

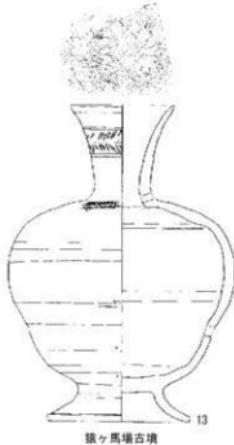


第27図 金田地区周辺図 (S=1/25,000)

明治34年発行 番号は第3表に対応



下長屋古墳
※1~11は金城町教委1983掲載図を使い拓本を加えた



番号	名 称	種 別	所在地・小字	概 要	備 考
1	金田 1 号墳	古墳	下米原 金田 八歳ヶ原平	円墳、横穴式石室、人骨、直刀、金環、須恵器、土師器	墳丘・出土品市指定
2	金田 2 号墳	古墳？	下米原 金田 八歳ヶ原平	鉄製直刀	破壊
3	猿ヶ馬場古墳	古墳	下米原 猿ヶ馬場	須恵器	墳丘破壊
4	下長屋古墳	古墳	下米原 河角セド山	円墳？、須恵器	消滅
5	火塚平古墳	古墳	下米原 ヒツカ平	横穴式石室	半壊
6	今福古墳	古墳	久佐 球神烟	横穴式石室？	消滅
7	水佐古門遺跡	散布地	下米原 水佐古門田	須恵器、土師器、打製石斧	
8	金田駄跡	製鉄遺跡	下米原 中屋敷	鉄滓	
9	虚空蔵	寺院跡	下米原 家敷	約100mの平地・宝篋印塔	
10	金田庄屋跡	屋敷跡	下米原 土居	石垣、庭園、池、屋敷跡	
11	吉留鍛冶屋跡	製鉄遺跡	下米原 加藤大夫	鉄滓	
12	吉留寺跡	寺院跡	下米原 葉蒔堂	三段目に井戸	
13	戈ヶ追跡	製鉄遺跡	下米原 鈴ヶ谷	鉄滓	
14	金屋平治屋跡	製鉄遺跡	下米原 金屋平		
15	茶園ヶ溢鉄穴跡	製鉄遺跡	下米原 茶園ヶ溢	鉄穴水路跡、鉄穴堤	
16	大吉屋窯跡	窯跡	下米原		消滅
17	木元窯跡	窯跡	七条	瓦	
18	みさわ窯跡	窯跡	七条 新開		

第3表 金田1号墳周辺の遺跡

0 20 CM

第28図 金田1号墳周辺の古墳

室の可能性がある。これまで長頸壺の体部下位の破片が紹介されていた。その後、見つかった破片が資料館に保管されており、頸部・脚部は接合しないがほぼ全形が復元できた。脚付長頸壺で頸部と肩部にはヘラ描き沈線と板状工具で矢羽状の文様が描かれる。脚部内面には接合のための押圧痕と爪形圧痕が円形に残る。

第2節 遺跡の概要

墳丘と石室（第30図）

金田1号墳は浜田市金城町下来原の金田川と周辺の谷を見下ろす丘陵上にあり、現在は畠の中に墳丘が残っている。かつては周辺一帯がたばこ畠で、造成の際に古墳が発見・調査されたが、現在は荒廃している。現状では直径約10m・高さ約1.5mの円墳と考えられている。昭和49年（既報告では昭和51年）に発掘調査が行われ、長さ約3.15m以上・幅約1.56～1.9m・高さ1.56m以上の横穴式石室（片袖式）が確認され、須恵器17、土師器2、鉄剣1、金環が出土した（金城町教育委員会1983）。昭和58年に現在残る墳丘と出土品が金城町指定文化財（現在は浜田市指定文化財）に指定されている。

金田1号墳の同一丘陵の約100m北でも造成中に鉄剣が見つかっており、金田2号墳とされている。しかし、石があったこと以外は不明なため、本当に古墳かは断定できない。

なお、墳丘測量図と石室実測図は既報告のものを使用しているが、石室実測図の方位を修正している。伐採を行った際に墳頂におよその石室位置が金属棒で示してあり、石床の位置に花台もあつたためである。修正後は墳頂の回みと石室主軸方向がほぼ合致する。

石室は羨道部が未調査だが、片袖式の横穴式石室である。玄室の右手前には石床があり、長頸壺（第31図・19）・直刀（20）が出土している。また、右側には須恵器が3個まとまって出土している。写真で实物と対比すると（5）の蓋、（6）のかえり付きの蓋、（10）の杯が、いずれも内面を上にして杯のようにして置かれている。他に玄室の左手前では土師器椀2個体（1・2）、左手奥で金環（21）が出土している。他の須恵器の出土位置は不明だが、おそらく石室実測図にある遺物は床面近くの出土で、他は床面からかなり浮いた状態の遺物と考えられる。また、石室図面には標高がないため、後述の墳丘断面図に石室位置をあてることはできなかった。

なお、この横穴式石室は畿内系片袖式石室とされている（角田1997）。

出土遺物（第30・31図）

（第30図・1～8）は金田1号墳の周辺（現在の墳丘からは離れた場所）で採取され、資料館に保管されていた須恵器で甕片（1～7）と蓋（8）がある。（1）は頸部で外面にカキメ、内面は同心円叩き痕が残る。（2～7）は外面の自然軸から同一個体の可能性がある。外面は平行叩きとカキメ、内面同心に円叩き痕が残る。

石室内出土遺物（第31図）

土師器（1・2）、須恵器（3～19）、鉄刀（20）、金環（21）がある。

土師器

椀（1・2）

底部はまるく、口縁端部は外反する。器壁の厚いものと薄いものがある。いずれも同様の淡褐色

色を呈し、漢道部側からまとまって出土していることから同時期と考えられる。

須恵器

蓋 (3 ~ 6)

天井部の調整と口径などから以下のとおり分けられる。

- ・口径 12.2 cm と蓋の中では最も大きく、天井部に回転ヘラケズリを行い、中心部にナデを施すもの。口縁端部内面のやや上がった位置をナデ調整しており器壁が薄くなる。(3)
- ・口径が 11.2 cm で天井部に回転ヘラケズリを行うもの (4)
- ・口径が 10.2 cm と小型で、調整が不明瞭だが、天井部の回転ヘラケズリを省略したもの (5)
- ・内面にかえりの付くもの。かえりの接地面は口径 8.4 cm である。天井部は周辺に回転ヘラケズリを施し、天井部を縱断する直線状のヘラ描沈線がある (6)

杯 (7 ~ 14)

すべて、たちあがりと受部のつくもので、かえりの付く蓋 (6) と組み合う杯はない。蓋と同様に底部の調整からわかる。

- ・たちあがりの上端径が 11 cm と最も大きく底部に回転ヘラケズリを行うもの。(7)
- ・底部に幅 3 ~ 4 mm の幅広の浅い板状圧痕の後に周辺に回転ヘラケズリ (1 ~ 2 周) を行う (8)。たちあがりの上端径は 9.8 cm である。
- ・ヘラ切り後、周辺に回転ヘラケズリを 1 ~ 2 周を行い、ナデ調整を行うもの (10 ~ 11)。(9) も口縁部の形状からこのタイプと見られる。たちあがりの上端径は 9.8 ~ 11.3 cm である。器高が 4.9 cm と高く、底部が丸まるもの (11) と器高 3.4 cm と低いもの (10) がある。
- ・口径が 8.5 ~ 8.9 cm と最も小型で、立ち上がりも短い。底部にヘラ切り後の回転ヘラケズリを行わない。薄く板状圧痕が残り、ナデ調整やユビオサエを行っているようである (12 ~ 14)

長頸壺 (15)

頸部が残っているが、体部片は未確認である。頸下端にカキメが残る。

短頸壺 (16)

以前は接合しないため別破片とされていたが、実物は接合復元されている。体部外面にカキメを施し、下位にはヘラケズリが残る。

高杯 (17 ~ 18)

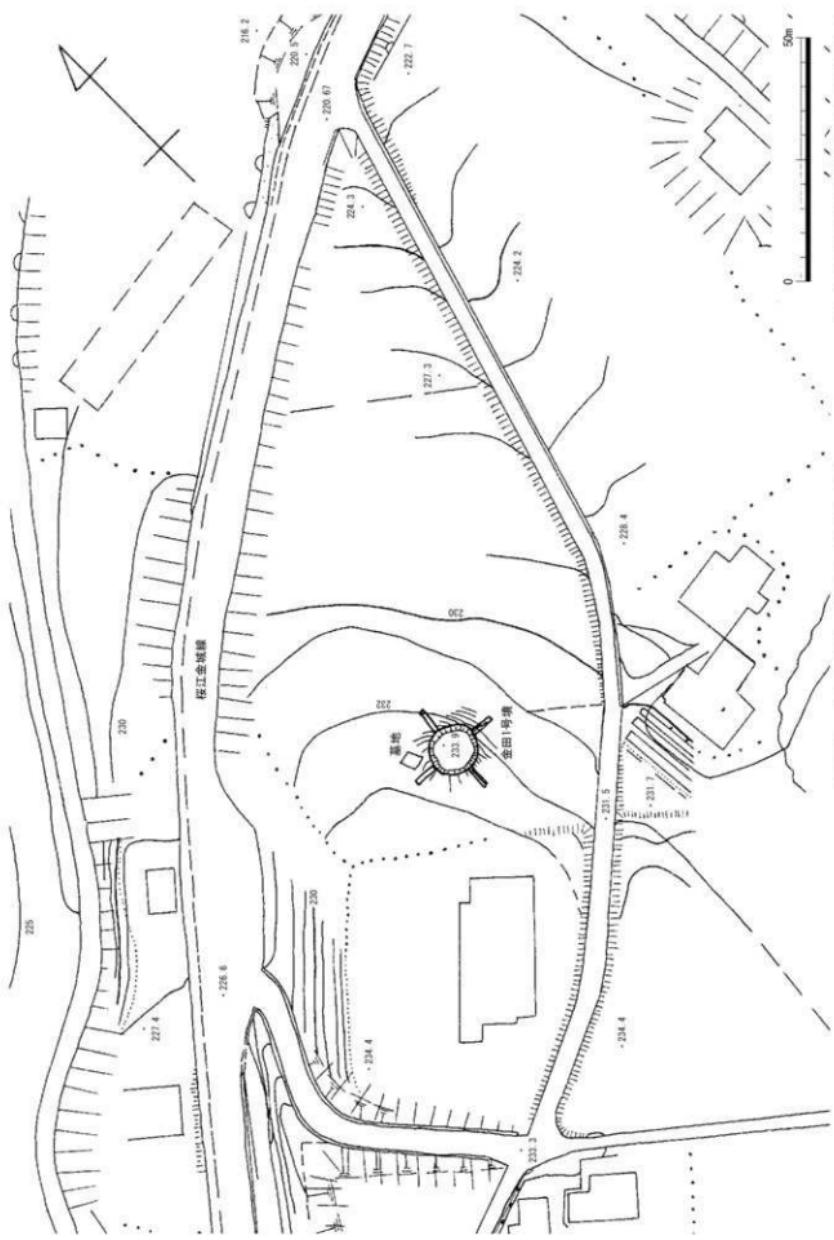
(17) は器高の低い高杯で杯部下位にはヘラケズリ痕が残る。(18) は他の須恵器と焼成が異なり、表面が黒色になる小型高杯の脚部である。脚部裾につまみ出しの突帯をつくる。

長頸壺か提瓶 (19)

これまで提瓶とされていたが、頸部が長く、肩部に厚く濃緑色の自然釉がかかり、把手がないことから東海系の長頸壺の可能性もある。口縁部はやや肥厚し外面に面をつくる。頸部には太い沈線がある。胴部の正円形側には回転ヘラケズリ痕が残る。

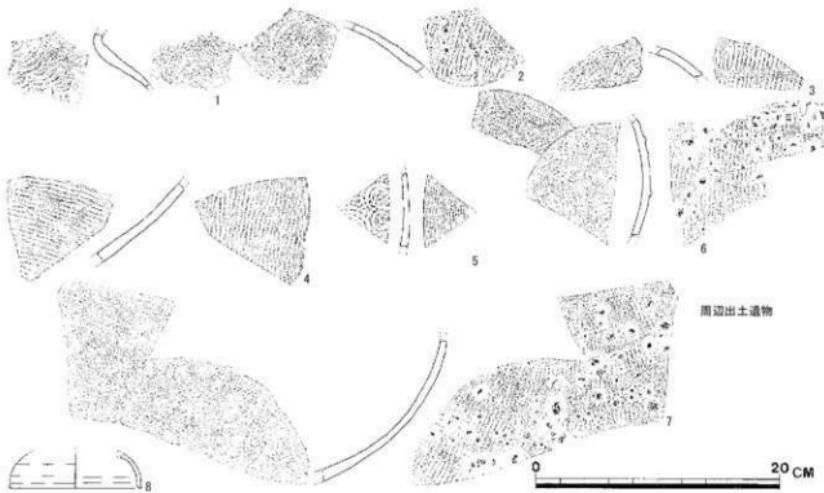
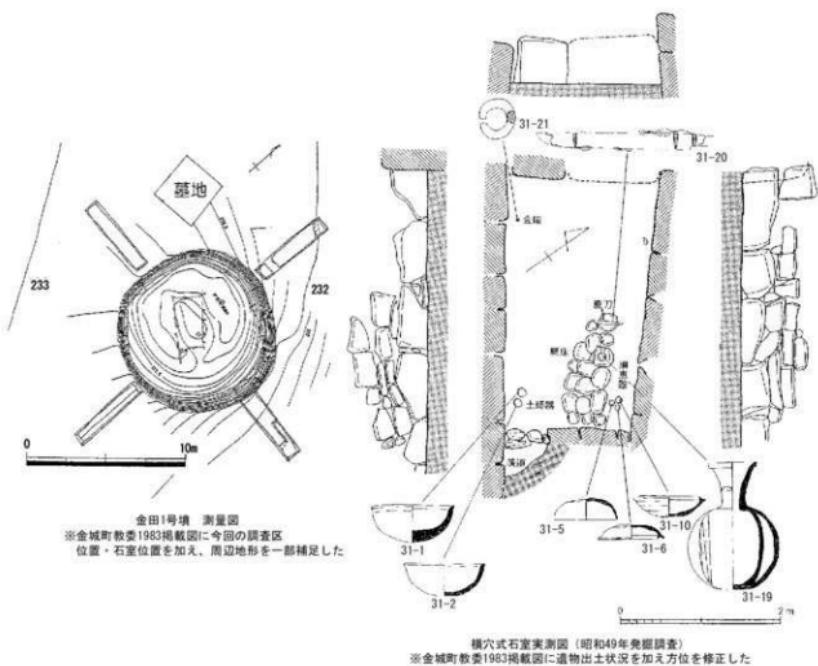
直刀・金環 (20 ~ 21)

直刀は鏽が進行しており保存状況が悪い。長さ 27.9 cm・幅 2.9 cm ~ 2.9 cm・茎幅 2.1 cm である。金環は直径 2.3 cm・断面径 0.7 cm で内面に金箔が残る。

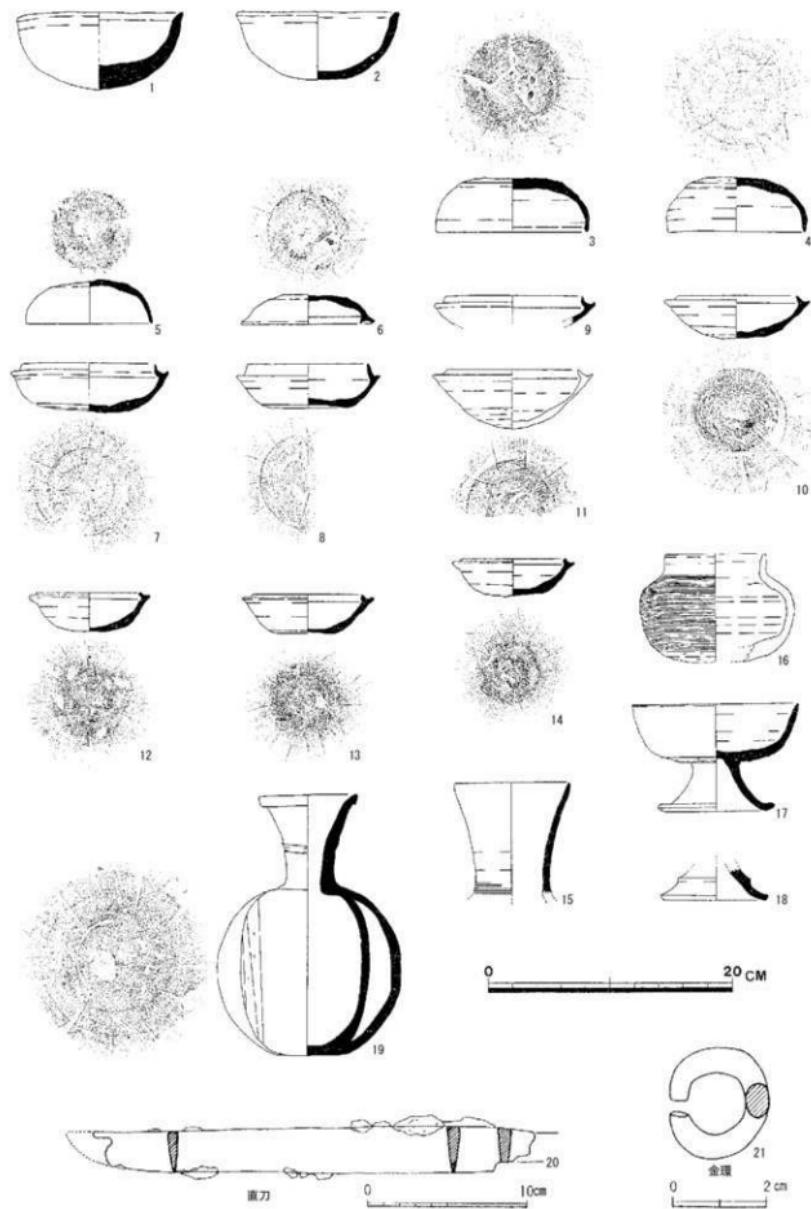


第29図 金田1号墳 周辺図 (S=1/1,000)

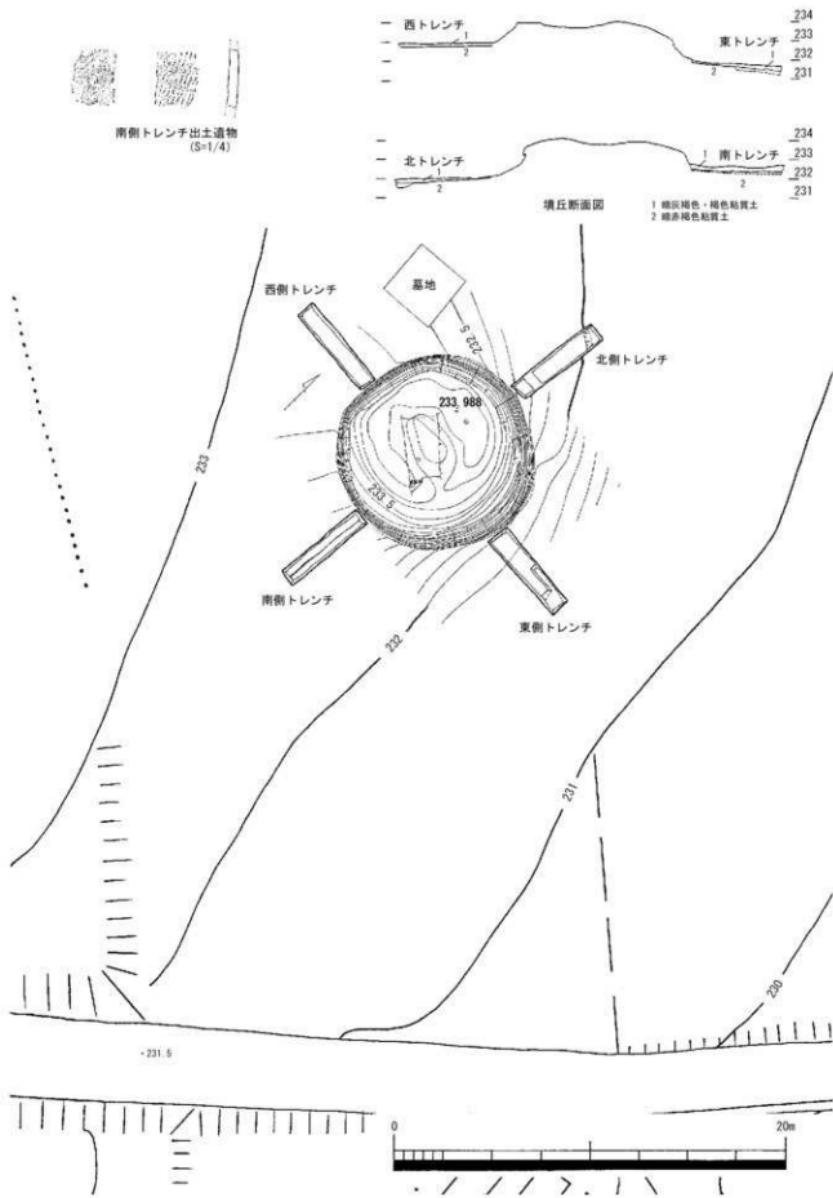
* 周辺地形は市道管理図などにより合成



第30図 金田1号墳 填丘・石室・周辺出土遺物実測図



第31図 金田1号墳 石室内出土遺物（昭和49年発掘調査）
※実測図は金城町教委1983掲載図を使い拓本を加えた。ただし11・16は接合したため再実測した



第32図 金田1号墳 実測図 (S=1/250)

第3節 調査の概要（第29・32図）

状況確認のため、現在残る墳丘に隣接して方位に合わせた調査区を4設定した。

北側トレンチ（1m×5m・5m²）

現地表下約9.4～12.9cmで暗褐色～暗赤褐色の地山面を確認した。地山は北側が岩質で南側は粘性土になる。地山面は緩やかに北側（古墳の外側）に向けて低くなっている。遺構・遺物は確認されなかった。

南側トレンチ（1m×5m・5m²）

現地表下約34.9～37.7cmで暗赤褐色の地山面を確認した。地山面はほぼ水平である。表土から須恵器甕片（第32図・1）が1点出土したが、遺構は確認されなかった。

東側トレンチ（1m×5m・5m²）

現地表下約21.5～48.7cmで暗赤褐色の地山面を確認した。地山面は緩やかに東側（古墳の外側）に向けて低くなっている。遺構・遺物は確認されなかった。

西側トレンチ（1m×5m・5m²）

現地表下約18～29.5cmで暗赤褐色の地山面を確認した。地山面はほぼ水平である。遺構・遺物は確認されなかった。

調査の結果、現在の墳丘周辺では須恵器片が1点出土したのみで、周溝など古墳にかかる遺構は確認されなかった。墳丘断面図では地山は南西側が高く、北西側が低くなる。これは丘陵の傾斜方向と一致する。調査区の表土自体が地山に近い粘性土で、周辺は開墾により旧地形が残っていない。しかし、概ね北東の金田川へ向かって延びる丘陵上という立地には間違いなく、古墳の規模は現状と同様に直径約10m・高さ約1.5mの円墳である。

第6章 周布古墳確認調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報告は、浜田市（浜田市教育委員会）が周布古墳の周溝内の堆積環境、埋没年代および古墳周辺の植生を推定するために、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した、珪藻分析、AMS年代測定、花粉分析等の報告書をまとめ直したものである。

周布古墳は浜田市治和町に立地する遺跡である。

分析試料について

第13図に試料採取地点（T5）と土層図を示す。①～⑤で珪藻および花粉分析試料を採取した。また、※でAMS年代測定試料（HS-①：6層、HS-②：8層）を採取した。

分析方法および分析結果

（1）微化石概査

花粉分析用プレパラート、および珪藻分析用プレパラートを用いて、その外の微化石、火山ガラスの含有状況を確認した。各微化石・火山ガラスの概査結果は、第1表のとおりである（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は、珪藻分析用プレパラートを観察した）。

（2）珪藻分析

処理は渡辺（1995b）に従った。プレパラートの観察・同定を光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。しかし、微化石概査結果に示したように、全ての試料で珪藻化石の含有量が極めて少ないか、検出されなかつた。珪藻化石が僅かに検出できた試料でも、破片として確認されたのみであり、種同定には至らなかつた。このことから、珪藻ダイアグラムを示さなかつた。堆積後の化学的作用により、ほとんどが消滅したと考えられる。

（3）花粉分析

処理は渡辺（1995a）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

分析結果を第3図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかつた試料No.5では、検出できた種類を「*」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群毎に累積百分率として示した。

（4）AMS年代測定

酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨（グラファイト）に調整し、加速器質量分析計（AMS）を用いて測定を行つた。

第2表に $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代、曆年較正年代、曆年較正年代を示した。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代は、リビーの半減期（5568年）を用いるとともに、 $\delta^{13}\text{C} = -25\text{‰}$ となるように補正・算出した曆年較正年代

代を、5年単位で丸めた値であり、西暦1950年からさかのぼった年代値である。曆年較正年代は、曆年校正用年代を曆年代較正データ（INTCAL04）を用いて、Oxcal Ver3.1により較正したものである。

花粉化石群集（花粉帯）の設定

花粉ダイアグラムを基に、以下のように花粉化石群集（花粉帯）を設定した。各花粉帯の特徴は、以下の通りである。本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

① III 帯（試料No.4）

マツ属（複維管束亜属）が卓越する。胞子の割合が高い。

② II 帯（試料No.3）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属が卓越する。胞子の割合が高い。

③ I 帯（試料No.2、1）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属、コナラ亜属が卓越する。これらのうち、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が減少傾向を示し、コナラ亜属が増加傾向を示す。また、草本花粉の割合が高く、特にイネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

年代測定値と推定年代

出土遺物等の考古学的資料から推定される周溝の埋積年代は、5世紀前半頃～中世末（AD450～1600年頃）であった。

周溝から得られたAMS年代測定値は、出土遺物などから推定された周溝埋積年代の内輪で収まつた。それぞれの測定試料が最下部、最上部で採取されたものではないことから、出土遺物などから推定された年代を周溝の埋積年代とすることの妥協性は高い。このことから、周布古墳の周溝が5世紀前半頃から中世末までの間にはほぼ埋まったことが明らかになった。

古環境変遷

（1）III帯期以前（試料No.5）

HS-②を試料No.5とほぼ同位置で採取した事から、AMS年代測定値の得られた7世紀中頃から8世紀後半の周溝の様子を示す。微化石概査結果で示したように8層（No.5層準）からは多量の炭片が検出され、おそらく周溝は空溝状態で、「古土壤」として堆積が進んだものと考えられる。また、炭片以外の植物片や、珪藻、プランクトン・オパールは堆積後の化学変化により溶解した可能性が示唆される。

（2）III帯期（試料No.4）

AMS年代測定値に挟まれた7～8世紀以降11～13世紀の周溝の様子を示す。草本花粉の割合が低いものの、キク科、アブラナ科などの乾燥環境で生育可能な種類の花粉が高率になると、胞子の割合が高いことから、古墳周辺には草地が広がり、周溝内も空溝状態であった可能性がある。

従来の浜田市内の花粉分析資料（渡辺, 2002）では、同時期にはスギ属が卓越する傾向にある。一方、今回の結果ではマツ属（複維管束亜属）が卓越する。このことから、アカマツ（あるいはクロマツ）が、墳丘上、あるいは近辺に育っていたと考えられる。

（3）II帯期（試料No.3）

古墳の葺石が堆積層中に含まれ、周布古墳が壊された（近辺が開墾された？）事が判り、AMS年

代測定から11世紀前半～13世紀前半頃のことと推定される。

前帶同様に草本花粉の割合が低いこと、検出される種類も乾燥環境で生育可能なものが高率であること、胞子の割合が高いことから、引き続き古墳周辺には草地が広がり、周溝内も空構状態であった可能性がある。イネ科(40ミクロン以上)花粉や、水草の花粉がほとんど検出できることから、古墳の周囲が開墾されていたとしても、畑であり、水田環境は考えにくい。

木本花粉ではスギ属花粉が急増し、マツ属(複維管束亜属)と同程度の出現率を示すようになる。従来の浜田市内の花粉分析資料(渡辺、2002)では、浜田市東部では古代～中・近世までスギ属花粉が卓越傾向にある。今回の分析結果でスギ属花粉が高率を示すことは、この結果と調和的である。ただし古墳の立地から、墳丘上にスギが自然に生育するとは考えにくい。現在は水田と化している周布古墳の南から南西に続く谷斜面、あるいは平野部にスギが生育していた可能性がある。

(4) I 帯期(試料No.2、1)

従来の浜田市内の花粉分析資料(渡辺、2002)では、中・近世以降スギ属が減少し、マツ属(複維管束亜属)が卓越する傾向にある。今回の結果では、スギ属、マツ属(複維管束亜属)がともに減少傾向を示し、コナラ亜属が増加傾向を示すなど、従来の傾向と異なる結果を得た。このため、花粉化石群集の対比から時期を特定することはできなかった。周溝の埋積した中世末以降のことと推定される。

層中に葺石が含まれなくなり、範囲は狭いものの水平堆積となる。また、イネ科(40ミクロン以上)が高率になるほか、いわゆる水田雑草を含む種類の花粉も多く認められる。周辺で水田が営まれたか、調査地点が水田であった可能性もある。また、コナラ亜属花粉が急増することから、墳丘上、あるいは近辺にコナラ類が育っていたと考えられる。

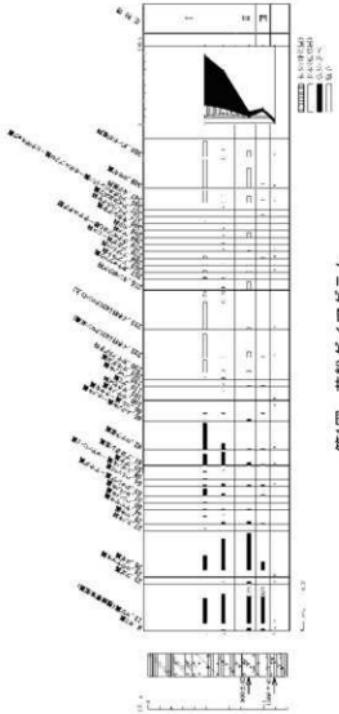
まとめ

今回のAMS年代測定の結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 得られた年代値と、発掘調査により推定された年代は調和的であった。周布古墳の周溝は8世紀頃に埋まり始め、15世紀頃には完全に埋まったと考えられる。
- (2) 得られたAMS年代と、同地点で実施された花粉分析結果から、周布古墳近辺の植生変遷の一部が明らかになった。特筆すべき事柄は、以下のことである。
 - ①周溝が埋まり始めた頃には、墳丘あるいは近辺にはアカマツ(あるいはクロマツ)が生育していた可能性がある。
 - ②周溝が埋まった頃には、古墳南の谷斜面にスギが生育していた可能性がある。
 - ③古墳近辺で水田耕作が始まった頃、墳丘上あるいは近辺にコナラ類が育っていたと考えられる。

引用文献

- 中村 純(1974) イネ科花粉について、とくにイネを中心として。第四紀研究, 13, 187-197.
- 渡辺正巳(1995a) 花粉分析法、考古資料分析法, 84-85. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳(1995b) 珪藻分析法、考古資料分析法, 86-87. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳(2002) 横路地区T10(横路遺跡)・清水地区T24(秋ヶ平遺跡)における微化石分析、浜田市遺跡詳細分布調査—国府地区I—, 61-69.



第1図 花粉ダイアグラム

試料No.	花粉	萎	植物片	硅藻	火山ガラス	ブランガラス
1	◎	○	○	△×	△	○
2	◎	○	○	△×	△×	△
3	◎	○	○	◎	△×	△
4	○	○	○	○	×	△×
5	△	◎	○	○	×	△×

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないと検出できる ×：検出できない
 △：非常に少ない △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

第1表 微化石観察結果

試料No.	試料の種類	補正無年代	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ による補正年代 -	較正年代(確率): INTCal04・OxCal 3.1	
					1σ 年代範囲	2σ 年代範囲
HS-①	腐植質粘土 250g (dry)	$(\text{yrBP} \pm 1\sigma)$ 895±40	-24.6 900 ± 40	$(\text{yrBP} \pm 1\sigma)$ 900 ± 40	cal AD 1,040 - 1,095 (45.7%) cal AD 1,120 - 1,140 (19.7%) cal AD 1,155 - 1,190 (31.7%)	cal AD 1,030 - 1,220 (100%)
HS-②	炭化物 0.845g (dry)	$1,315 \pm 40$	-25.9	$1,300 \pm 40$	cal AD 670 - 720 (63.6%) cal AD 740 - 770 (36.4%)	cal AD 655 - 780 (96.5%)

第2表 AMS年代測定結果

第7章 総括

石見中央部最大の前方後円墳である周布古墳、周布地区の中規模古墳である蔵地宅後古墳・金城地区の代表的な古墳である金田1号墳の調査により、部分的であるが石見地域の古墳文化を考えるための基礎資料を提示することができた。以下、各古墳についてまとめるが、古墳の時期区分は10期区分と編年表（内田他1991・大谷2003・第3表）、埴輪は円筒埴輪編年（川西1978・川西1992）、須恵器は出雲・石見編年（大谷1994、2001・山陰横穴墓調査検討会1998・島根県立八雲立つ風土記の丘1998・第34図・第3表）に基づいている。

第1節 周布古墳について

墳丘

確認された古墳端や周溝から全長約74m・幅約7mの周溝を巡らす前方後円墳として復元できる。これまでの復元案として72.4m（島根県教育委員会1963）・68m（内田律雄他1991）・約69m（浜田高校歴史部・大谷1995）などがあった。調査結果から、現在残る墳丘より約1～4m離れた場所で墳端と考えられる段や葺石基底石が確認された。現状より大きいことは確実である。墳丘の復元は、現在残る墳丘部分は既に復元図（浜田高校歴史部・大谷1995）があり、2段目以上は基本的にそのまま使用する。主軸と後円部中心も同様である。

墳端をつなげば前方後円形になる。後円部はくびれ部からT5・T7・T2・T9は正円に近く、T3とT9の間の突き出した平坦面の下場にある。ここからT3・T4の段へはやや不正円になる。前方部はT5・T10・T8はほぼ直線で、T6はやや外側へ開く。T6とT9の間で前方部が広がる可能性もあるが、現状ではT6から前方部を広げておく。

前方部前端は確認された溝が小さく墳丘主軸に直行しないことから、前方部区画の構と決定しにくい。現段階では最も小さくみてT13の墳丘側の溝下場をとる。

後円部1段目は前述の北西（T3とT9の間）に残る平坦面を参考にする。この平坦面の下場は墳端の推定線にあたる。この平坦面は最大4mの幅があり、史跡内のため調査は行っていないが、盛り上げて後世に造った平坦面とは考えにくい。このため後円部1段目は最大幅約4mのテラス状の段がつく可能性がある。72.4mの復元案（島根県教育委員会1963）はこのテラスを含めたであろう。ただし、最大幅の4mをT3側にあてると墳端の可能性のある段より外に出るため幅3mで復元している。後円部の高さ7.8mのうち1段：2段：3段の高さは1.8:1.75:4.25となり、1段目のテラス上の段は横幅が広く斜面が他に比べてきつくなる。

前方部の復元は、現状の2段の場合はT6側で見ると高さ4.9mのうち下段と上段の高さが2.3:2.6と下段が後円部に比べ高くなり、前方部は3段か2段になる可能性がある。後円部3段、前方部を2段とした場合、後円部1段目はくびれ部でなくなる（第33図・復元案1）。

前方部3段の場合、テラスの幅は後円部1段目テラスほど幅広にせず、2段目を参考に幅1.2mとする。前方部頂部から前端側への傾斜と、後円部から続く段の高さを参考に幅1.2mのテラスを2段復元する、前端部1段目の斜面は後円部ほどではないが傾斜がきつくなる。T6側の復元後の1段:2段:3段の高さは1.1:1.2:2.6となり、下2段がやや低い。復元した前方部1段目を現地形にあてるとT6周辺では墳丘裾にある現在の畦道外縁にあたるが、くびれ部に向けては畦道が主軸側へくいこむ。後円部と前方部の1段目は復元幅が異なるため、後円部1段目はくびれ部にかけて幅

を狭める（第33図・復元案2）。

前方部1段目の幅が後円部1段目のように幅広のテラスがつく可能性も残り、前方部と後円部1段目の復元は今後の検討課題である。復元した墳丘規模は次のようなになる（註1）。

主軸 N 141° E 墳長 74 m 後前比高差 -0.5 m

後円部 径 45 m 高さ 7.8 m くびれ部幅 25.8 m

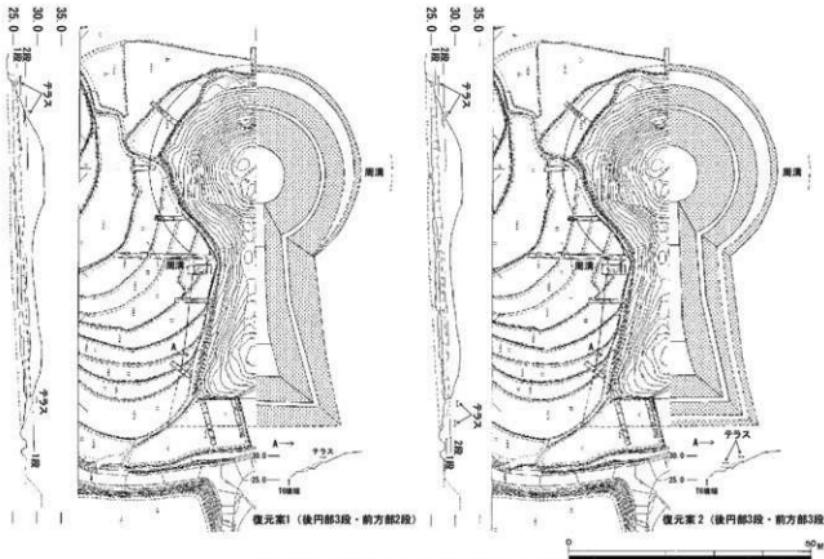
前方部 幅 36 m 長さ 34 m 高さ 4.1 m

復元形は現状の墳丘に比べ、くびれ部の幅が広がり、全体的に一回り大きくなったものである。

前方部幅はやや開くが後円部幅より小さく、後円部頂より前方部頂がやや低い。後円部1段目の幅広のテラス状の平坦面は、傾斜する台地上に立地するため後円部が前方部に比べ低くならないようバランスをとった可能性がある。また平野側からは後円部からくびれ部がよく見えるため、見かけをよくしたとも想定される。

墳端と2段目以上を中心に基内の大型前方後円墳（東広島市教育委員会 1997）と比較すると、正確に合致しないが墳形のバランスや前方部の形は佐紀陵山古墳（4期）と仲津山古墳（5期）の中間のような印象を受ける。次に述べる埴輪の時期とも矛盾しない。

復元図と現状を比べると、ほぼ墳丘下段が削平されている。周溝はAMS年代測定（第6章参照）では概ね最下層が8世紀、葺石堆積層の上層が15世紀頃とみられ、中世頃には墳丘の削平が始まつた可能性がある。古墳が傾斜面に造られていることから、周溝は低い後円部側が浅く、深さは一定でないと思われる。珪藻もほとんど検出されないことから、水が時々溜まる程度であろう。



第33図 周布古墳 復元図 (S=1/1,000)

埴輪

石見地域では現在埴輪を樹立した古墳は、益田市の大元1号墳（益田市教育委員会 1988）・スクモ塚古墳（島根県教育委員会 1963・井上 1983）、浜田市の周布古墳・めんぐろ古墳と少なく、石見で埴輪の変遷を追うには資料が少ない。周布平野では周布古墳とめんぐろ古墳・日脚遺跡で埴輪が出土している。この2例については既に検討が行われ、周布古墳の埴輪がめんぐろ古墳・日脚遺跡の埴輪より古いことが指摘されている（島根県教育委員会 1985）。

周布古墳で出土した埴輪は破片のため全体を復元できなかったが、朝顔形埴輪と普通円筒埴輪がある。すべて淡灰褐色から褐色系の土師質のもので、断面や外面の一部が黒い個体が目立ち須恵質のものはない。摩滅し表面が観察しにくいものが多い。墳丘で表探されるものは褐色系の色調だが、調査で出土した埴輪は淡黄褐色系で容易に区別できる。周辺は周溝内に石が溜まっていたこともあり水気が多く、長期間水に浸っていたため退色したと考えられる。

朝顔形埴輪の上半部を復元すると、大きく開く口縁部から受部があり丸い肩をもつ頸部・肩部に続くと考えられる。壺形埴輪のような肩部（第20図・39など）や径の小さい底部（第19図・15）もあるが、全形が不明なため断言はできない。

口縁受部

- ・内面に段が付かず、同様の器壁で口縁端部へ広がるもの（第20図・28など）が多い。
- ・内面に段が付き複合口縁状になるもの（第7図・7）が1点ある。

頸部

- ・突帯のないもの（第20図・31など）が多い。
- ・突帯が一条つくもの（第19図・9）は少ない。

肩部から胴部

- ・丸みをもち、沈線が施されるもの（第7図・12）は1点ある。
- ・丸みをもち、一次調整のハケメがほぼ全面に残るもの（第20図・38）は多いが、胴部にかけても丸みをもつようなもの（第20図・39）もある。
- ・しっかりと屈曲し、胴が筒状になりタガが付く（第19図・10）。

周布古墳の埴輪の特徴をまとめると以下のとおりである。

- ・土師質焼成で黒斑（断面や外面の一部が黒色）がみられる。
- ・口縁端部はやや開くものもあるが、大半は直線的に屈曲するものはない。
- ・タガは高さ0.8～1.8cmで断面が台形に近いものと丸みをもつものとが混在する。
- ・透孔は円形か半円形の可能性があるものがあるが、方形のものは確認できない。
- ・底部は潰れたままの状態で分厚く、底部再調整を行わない。
- ・口縁端部から1段目までのタガまでは6.1～6.8cmである。
- ・朝顔形埴輪肩部内面と底部内面を中心にケズリ調整が見られる。外面にケズリ調整と見られる砂粒移動と面があるが、木目の付かない板状工具でなでた可能性もある。
- ・外面の一次調整のタテハケは単位が狭いもの（幅約1mm）と幅広（幅約3mm）のものがあり、幅広のものが多用されている。
- ・外面の二次調整はタテハケ（胴部）と断続的なヨコハケ・ナデ（口縁部）が認められる。

埴輪の時期は、円筒埴輪編年Ⅱ期に近い様相（二次調整のタテハケと断続的なヨコハケ・ケズリの多用）と、Ⅲ期に近い様相（やや退化したタガ形・円形？透孔）が見られる。壺形埴輪の可能性がある破片もある。現段階では新しい様相を見てⅢ期と考えるが、Ⅱ期に遡る可能性も残しておきたい。10期編年の5期にあたる。

石見で近い時期の資料としては、益田市の大元1号墳の埴輪がある。ヨコハケを施さず、突出するタガをもち円筒埴輪編年Ⅱ期である（大谷1995）。埴輪のタガは断面四角形で突出も高く、10期編年の4期（内田他1991）にあたり、周布古墳よりやや古い古墳である。スクモ塚古墳の埴輪は大元1号墳にくらべ退化しており、周布古墳とほぼ同様か、やや後出と見られる。

周布古墳より後出する埴輪として、めんぐろ古墳・日脚遺跡の埴輪がある。日脚遺跡では埴輪が窯跡群周辺の谷底から出土しており、めんぐろ古墳の埴輪を焼いた窯が日脚遺跡周辺に存在した可能性が指摘されている（島根県教育委員会1985）。めんぐろ古墳は初葬が石見2期にあたり、石室跡北側の工事で埴輪が見つかっている。埴輪は円筒埴輪編年V期で、10期編年の9期（内田他1991）である。

めんぐろ古墳・日脚遺跡の埴輪の特徴は以下のとおりである。

- ・土師質焼成のものと、褐色で硬質な須恵質のものがある。（めんぐろ・日脚）
- ・タガの高さが0.6～0.8cmと低く、断面はナデでM字状に回む。（めんぐろ・日脚）
- ・円形透穴がある。（めんぐろ・日脚）
- ・タテからナナメ方向の細かいハケメ（一次調整）がある。（めんぐろ・日脚）
- ・口縁端部にタガと同様にナデによる回みがある。（日脚）
- ・タガが2段以上確認でき、口縁端部から1段目までのタガまでは5cmと短く、タガ間隔は6.4～7cmである。（日脚）
- ・尖り気味の底部があり、底部再調整を行っている。（日脚）

周布古墳は石見中央部で最も古い大型前方後円墳で、それに伴う埴輪製作や築造技術は他地域からの導入・影響を受けたと考えられる。埴輪の技術系譜は、他地域の類似する埴輪が現段階では不明なため今後の検討課題である。その後、日脚遺跡における陶邑からの須恵器製作技術の導入を経た埴輪製作（可能性）は、ある程度規格性をもっていたと見られる。しかし、いずれも二次調整のヨコハケをほとんど行わない点は石見中央部の地域色かもしれない。

弥生時代の遺物

周溝の外側（T11）では弥生土器を中心に古墳以前の時代の遺物が出土した。T11では遺構は確認できず、流れ込み状の遺物が谷斜面で出土している。前方部前端の工事の際にも弥生前期の土器（第7図・20、21）が出土しており、墳丘盛土に弥生土器が含まれているのであろう。古墳を築造する際に丘陵上にあった弥生時代の遺跡を壊した可能性がある。T11出土の甕（第21図・45、46）は口縁下端部に刻み目をいれ、胴部の張りは無く直線的である。弥生時代前期・石見I-2様式（柳原2005）にあたる。弥生土器は前期とみられる破片が多く、黒曜石（石織・石核）も見られる。ほぼ同時期の周布川河口部にある鰐石遺跡との関係が注目される。鰐石遺跡では石見I-3様式の遺物を多く出土する土坑群が確認されており、石見I-2様式のものは少量見られる。石見I-2様

式段階には小集団が丘陵上や河口部にあり、石見 I~3 様式段階で集団の集合と拡大があったよう見える。また、両遺跡とも黒曜石の石核・製品（石鐵）がともにみられる。いずれも黒曜石の产地分析は行っていないが、周布古墳では概ね黒色の隱岐産のもの（石核・石鐵）26 点、淡灰色の大分県姫島産の剥片が1点ある。鰐石遺跡には見られない姫島産の黒曜石が1点見られ、隱岐産の黒曜石を主体にしながら他地域（姫島産）の黒曜石も入手していた金城町の岩塚Ⅱ遺跡（島根県教育委員会 1985）の様相に似ている（島根県教育委員会 1996）。

周布古墳と古墳時代中・後期の浜田

周布古墳は、現段階では概ね5世紀前半（5期）に築造され、現在石見中央部でもっとも古い大型前方後円墳である。これは4世紀の後半から在地的酋長墓がおとろえはじめ、5世紀の前半にかけて、近畿の大型前方後円墳を各地で再現する気運が高まり、地方の王として威信を確立しようとした大酋長が、各地で数を増やしたことの反映（松木 2007）と見ることができよう。周布古墳と小地域は異なる可能性があるが、浜田市金城町波佐の千年比丘1号墳（1期？・金城町教育委員会 1994・東山 2002）は、前述の弥生時代以来の系統をひいた在地的酋長墓であろう。

また、周布古墳は以前からミヤケ（三宅・宮家・屯倉）との関係が指摘され、畿内との関係が考えられている（第3章 第1節参照）。「屯倉」については諸説あるが、概ね倭王権が列島に置いた直轄地で4・5世紀に近畿に成立する開墾地系屯倉と6世紀後半以降の後期屯倉がある。一方で倭王権が6世紀に設置した地方支配の拠点施設でのち田地を伴うものが出現したという説がある（佐藤 2007・註2）。

周布古墳を5世紀前半頃と見ると、倭政権とのつながりの中で築造された石見中央部で最初の大型前方後円墳という歴史的意義は変わらないが、6世紀以降に地方に成立する「ミヤケ」との時期的な関係は考えにくい。「ミヤケ」成立の遠因の可能性は残る。むしろ、その後の日脚1号窯での須恵器焼成（6世紀初め）を経た、めんぐろ古墳（6世紀前半）と「ミヤケ」の関係を考慮すべきであろう。日脚1号窯は、陶邑からの技術拡散により成立したと見られ、高杯脚部のつくりから陶邑窯東地域（陶器山・高藏寺地区）系譜とされている（菅原 2006・註3）。また、6世紀中葉以降には渡来人がミヤケ経営に関わったという指摘もある（前掲註2・田中 2002）。森ヶ曾根古墳（10期・石見3期）から出土した、伽耶の高麗地域の土器に似た小型器台（浜田市教育委員会 1986・定森 1989・註5）を想起させる。

一方、「三宅」の地名は浜田市東部の上府町にもある。現在地名の残る上府小学校付近から約500m北西には半場口2号墳（6世紀末～7世紀代か）、片山古墳（7世紀中頃）、下府廃寺（7世紀末頃）と有力者の存在を示す遺跡が続いている。その後、上府町を含む国府地区には所在は確定されていないが、石見国府がおかれたと考えられる（浜田市教育委員会 2002b）。

5世紀前半からやや空白期を経て6世紀前半まで有力者の存在を示す遺跡（大型古墳・窯跡）が続き、6世紀後半以降には中小古墳が造られる周布地区と、6世紀末頃から7世紀末に有力者の存在を示す遺跡（古墳・寺院）が出現し、石見国府がおかれる国府地区の両方に倭政権の直轄地であるミヤケが存在したと見られることは、古墳時代の浜田を考える一要素として注意する必要がある。

第2節 藏地宅後古墳について

藏地宅後古墳の横穴式石室は奥壁の幅約2m・長さ2.3m以上で東に開口し、羨道と床面の半分は崩落している。墳丘と石室の大半が壊れしており、全体の規模が不明だが、奥壁幅からみても大型の横穴式石室をもつ古墳であったことがわかる。側壁は4列確認できたが、その先は石の掘形も流出しており袖石の有無など玄室形態は不明である。

墳丘は削平・流出しているため断定はできないが、現在残る丘陵部が最大10m程あり、周溝が石室奥壁に平行せず、径10m前後の円墳とであろう。周辺には日脚古墳群（島根県教育委員会1985）・森ヶ曾根古墳（浜田市教育委員会1986）など多くの横穴式石室をもつ古墳がある。時期の古いめんぐろ古墳を除くと、周布地区では最大の横穴式石室をもつ古墳である。

出土品は表採品と併せて須恵器蓋6・杯5・短頸壺2・短頸壺蓋1・提瓶1・躰1・高杯2・台付椀1・小型杯1・鉄刀2片・不明鉄製品である。石室奥壁側（T1）は近年掘り起こされたと見られ、搅乱土から石見4期の蓋杯（第26図・1～4）と台付椀（7）、小型杯（8）などが出土している。また石見4期・6B期の遺物は石室羨道側、最終の7期にあたる杯（21）が石室やや中央よりで出土している。

須恵器の蓋杯には、「石見型」（内田1984・島根県立八雲立つ風土記の丘1998）と仮称される、底部に板状圧痕を残すものがある（4・18）。石見3期が初現である（島根県立八雲立つ風土記の丘1998）。藏地宅後古墳の石見4期の蓋杯には「石見型」と全面ヘラケズリのものがある。底部の板状圧痕も部分的に薄く底部に圧痕が残り、周辺にヘラケズリを行うもの（18）や、底部が平坦で明確に圧痕が残り、周辺にヘラケズリを行うもの（4）がある。後者の蓋杯は日脚古墳群にも多く見られ、その技法の拡がりの検討が課題である。

台付椀（7）と小型杯（8）は表面に自然釉が厚くついて良好な焼成で他の須恵器とは異なる。体部の突帯も後期古墳や横穴墓から出土する台付椀と比べても高く、全体的に細身である。これまでの台付椀の研究（藤川1993）でも同一例はない。一見、陶質土器を思わせる（註4）が、国内他地域からの搬入品の可能性がある。出土位置からおそらく初葬（石見4期）時に石室に入れられたのであろう。

遺物はおよそ6世紀末～8世紀初頭のもので、築造時期は発掘調査が行われた周辺の森ヶ曾根古墳（石見3期）より後出で、日脚古墳群（石見4期）とほぼ同時期である。特に、森ヶ曾根古墳は同じ周布川左岸に位置しており、直線距離で500mほどである。森ヶ曾根古墳からは伽耶の高麗地域の土器に酷似する小型器台も出土している（定森1989・註5）。両古墳とも直径10m前後の円墳で、この2古墳の被葬者の関係と交易範囲が興味ぶかい。

なお、その後石室は全面調査され、さらに遺物が出土している。全体的な総括は報告書（浜田市教育委員会2008）に掲載している。

第3節 金田1号墳と金城地区の後期古墳について

金田1号墳周辺の確認調査の結果、須恵器片が1点出土したのみで周溝など古墳にかかる遺構は確認できなかった。調査区の土は地山に近い粘性土で、周辺は開墾で旧地形が残っていない。古墳の規模は現状と同様の直径約10m・高さ約1.5mの円墳であろう。

昭和49年に横穴式石室が発掘調査されて遺物が出土し、出土品と墳丘が昭和58年に旧金城町指

定文化財（現在は浜田市指定文化財）になっており、調査に併せて再検討を行った。

須恵器は石見 5 期～6B 期のもので、石室内の出土状況を見ると小型の蓋（第 31 図・5）、杯（10）、かえりの付く蓋（6）が、3 個とも杯状に置かれて出土している。古墳時代以来の蓋杯と、かえりやつまみの付く新しい蓋杯が混在する石見 6B 期の様相を示している。石床の上に置かれた長頭壺（19）は東海系の影響を受けたと見られ、先述の 3 個と併せて最終埋葬の可能性がある。

石見 5 期の杯（第 31 図・8）には底部に浅く板状圧痕が残る。藏地宅後古墳や日脚古墳群ほど明確なものは無いが、「石見型」蓋杯といえよう。また、直線距離で北西約 900m の位置にあった同時期の下長屋古墳では、やや口径の大きい「石見型」蓋杯が出土している。板状圧痕は幅 1mm 程の細かいものが蓋、幅 3mm 程の粗いものが杯に残る。

古墳の周辺には金田川や下府川が流れ、金城北部でも平地が多い地域である。金田 2 号墳・猿ヶ馬場古墳・下長屋古墳・火塚平古墳・今福古墳など多くの古墳があり、いずれも中・小規模の古墳である。この地域には、古墳の被葬者（有力農民か）が、それぞれ谷水田を開発して分居し、金田川（金田古墳群・猿ヶ馬場古墳）・下府川の上手（今福古墳）・下手（下長屋古墳・火塚平古墳）の 3 つのグループに分けられている（大谷 1992）。古墳時代後期の金城北部の様相を知る上で重要な古墳である。

註

- (1) この数値と復元図は以前発表したもの（柳原 2004）とは異なり、別に発表された数値（本庄考古学研究室 2005）に近い。
- (2) 屯倉については以下の文献も参考にした。
前野和己 2007 「屯倉」『日本歴史事典』3 吉川弘文館・平野邦雄 1992 「屯倉」『国史大事典』第 13 卷
吉川弘文館・狩野久 1992 「畿内のミヤケ・ミタ」『新版 古代の日本』第五巻 近畿 I 角川書店
田中史生 2002 「後來人と王權・地域」『日本の時代史 2 倭國と東アジア』吉川弘文館
- (3) 陶邑からの技術拡散については以下の文献も参考にした。
藤原学 1992 「須恵器生産の展開」『新版 古代の日本』第五巻 近畿 I 角川書店・菱田哲郎 1992 「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第 39 卷第 3 号 考古学研究会・菱田哲郎 2003 「須恵器生産からみた地域間関係」「埴輪・円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析ー」埋蔵文化財研究会・菱田哲郎 2004 「古墳時代中・後期の手工業生産と王權」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会
- (4) 1999 年に小田富士雄先生が実見された際のコメントを、東森晋氏よりご教示いただいた。この時は体部破片のみの状態である。新羅の土器に近い印象を受けるが、全体的な焼成の具合から国産の須恵器だという評価である。
- (5) 1988 年 10 月 16 日付毎日新聞「浜田の須恵器 朝鮮の工人、島根で製造? 韓国学者が渡米説否定」では金元龍ソウル大学名誉教授の実物確認により、森ヶ曾根古墳の小型器台は新羅時代の土器に似るが、周囲のカーブや透かし穴の位置が違い、朝鮮半島で作ったものではないとされている。しかし、一方で古墳出土の他の須恵器と焼成が違うとの指摘（定森 1989）もある。現段階では半島産か国産かは断定できず、他地域からの輸入品とする。

また、この小型簡形器台は古墳初葬時の TK10 型式期以外は高靈地域加耶土器の存続年代に重ならず、須恵器 TK10 型式に相当するものであり、高靈 IIIA 期前後であろうとされている（白井 2003）。また、上つても 6 世紀中葉のもの（定森 1989）ともされている。陶邑と石見の須恵器の併行関係は出雲編年を介しており対比ににくいが、小型器台の製作時期は概ね古墳初葬（石見 3 期・TK43）か、それ以前（TK10）と見られる。

参考文献

- 井上寛光 1982 「出雲の円筒埴輪」『松江考古』第5号 松江考古学談話会
- 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸 1991 「第5章 石見」『前方後圓墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 内田律雄 1984 「出雲刈山4号墳と搬入須恵器」『ふいーるど・のーと』No.6 本庄考古学研究室
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし 陶色の須恵器』
- 大谷晃二 1992 「石見地域の古墳文化～地域の古墳の教材化をめざして～」浜田高等学校研究紀要 17
- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
- 大谷晃二 1995 「石見」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西郷の横穴式石室」『上石堂平古墳』平田市教育委員会
- 大谷晃二 2003 「第4節 宮山古墳群をめぐる諸問題」『島根県古代文化センター調査研究報告書16 宮山古墳群の研究』島根県教育委員会
- 金城町教育委員会 1983 『金城町の文化財』第1集 町内の古墳一
- 金城町教育委員会 1986 『島根県那賀郡金城町内遺跡詳細分布調査報告書I 一波佐・長田地区一』
- 金城町教育委員会 1987 『島根県那賀郡金城町内遺跡詳細分布調査報告書II』
- 金城町教育委員会 1994 『波佐』
- 金城町 2003 『金城町誌』第6巻
- 川西安幸 1978 「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64-2 のも川西安幸 1988 『古墳時代政治史序説』 墓書房に収録
- 川西安幸 1992 「河内への道一序にかえてー」『古代文化』44-9 古代学協会
- 角田徳幸 1997 「島根県の横穴式石室」『芸備 第26集』芸備友の会
- 柳原博英 2004 「周古墳の埴丘調査」『島根考古学会誌 第20・21集』島根考古学会
- 柳原博英 2005 「浜田市鰐石遺跡出土遺物－弥生前期土器を中心にー」『古代文化研究』第13号 島根県古代文化センター
- 定森秀夫 1989 「日本出土の“高靈タイプ”系陶質土器(I) - 日本列島における朝鮮半島系遺物の研究 -」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第2集
- 佐藤長門 2007 「屯倉」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
- 山陰横穴墓調査検討会 1998 「石見・隠岐の横穴墓の年代を考える」
- 島根県立八雲立つ風土記の丘 1998 「八雲立つ風土記の丘」No.147・148・149 合併号
- 島根県教育委員会 1963 『島根の文化財 第3集』
- 島根県教育委員会 1985 『日脚遺跡』
- 島根県教育委員会 1985 「岩塚II遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』
- 島根県教育委員会 1992 「大溢遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 島根県教育委員会 1995 「久本奥窓跡」『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』
- 島根県教育委員会 1996 「海を渡った黒曜石」『いにしえの島根ガイドブック』第1巻
- 白井克也 2003 「日本における高靈地域加郡土器の出土傾向」『熊本古墳研究創刊号』熊本古墳研究会 <http://www.ops.dti.ne.jp/~shr/wrk/2003d.html>
- 菅原雄一 2006 「陶色窯跡群の地域差と技術拡散」『考古学研究』第53巻第1号 考古学研究会
- 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- 高橋克壽 1996 『歴史発掘9 境輪の世紀』講談社
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 浜田高校歴史部・大谷晃二 1995 「浜田市周古墳測量調査報告書[上]」『島根考古学会誌』第12集島根考古学会
- 浜田市教育委員会 1986 『周布小建設予定地内埋蔵文化財(森ヶ曾根古墳)発掘調査報告書』
- 浜田市教育委員会 2002a 『浜田の文化財』
- 浜田市教育委員会 2002b 『浜田市遺跡詳細分布調査一国府地区I-1』
- 浜田市教育委員会 2008 『蔵地宅後古墳』
- 広島市教育委員会 1995 『第1回三ツ城古墳シンポジウム記録集 大型古墳の出現と謎の五世紀』
- 東広島市教育委員会 1997 『第3回三ツ城古墳シンポジウム記録集 大型古墳の築造と企画』
- 東山信治 2002 「山陰の前期古墳集成 石見」「山陰の前期古墳」第30回山陰考古学研究集会事務局
- 藤川智之 1993 「古墳時代須恵器輪・台付輪の検討」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』第2号 徳島県埋蔵文化財センター
- 藤永照隆 1997 「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会
- 本庄考古学研究室 2005 「石見・隠岐の主要古墳一覧」『島根考古学会誌 第22集』島根考古学会
- 埋蔵文化財研究会 2003 「埴輪-円筒埴輪製作技法の観察、認識、分析ー」
- 増野晋次 2001 「益田・鶴ノ鼻古墳群について」『松江考古』第9号 松江考古学談話会
- 増野晋次 1996 「石見の横穴式石室」「山陰の横穴式石室」第24回山陰考古学研究集会事務局
- 益田市教育委員会 1988 「益田市遠田地区遺跡分布調査報告書I・II」
- 松木武彦 2007 『全集 日本の歴史 第1巻 列島創世記』小学館
- 1988年10月16日付毎日新聞「浜田の須恵器 朝鮮の工人、島根で製造? 韓国学者が説來說否定」
- 渡辺貞幸 1986 「2 地域政権の確立と衰退」『図説発掘が語る日本史』第五巻 中国・四国編 新人物往来社
- 渡辺貞幸 1995 「山陰の大型古墳」『第1回三ツ城古墳シンポジウム記録集 大型古墳の出現と謎の五世紀』東広島市教育委員会
- 渡辺貞幸 1988 「小丸山古墳とその時代」『島根考古学会誌』第5集 島根考古学会

須恵器 蓋坏の変化		石見の主な古墳	
1		須恵器生産の開始 日御古窯跡群 (浜田市)	中山町古墳群
550年	2 	横穴式石室の受容 めんぐろ古墳 (浜田市) やつおもて18号墳 (旭町)	石見町古墳群 (石棺)
600年	3 	石見型須恵器の出現 下川原横穴墓 (石見町) 北長廻1号横穴墓 (2次調査・益田市) 明神古墳 (仁摩町)	山ノ内古墳群 (横穴式石室)
650年	4 	湯谷悪谷2号横穴墓 (石見町) 芝古窯跡群 (益田市)	益田市北長廻横穴墓群
6	5 	長尾原B-1号墳 (瑞穂町) 野伏鹿古墳 (羽須美村)	
A	6 	郷上古墳 (大和村) 江迫1号横穴墓 (瑞穂町)	
B	7 	葛ノ鼻E-4号墳 (益田市)	
C	8 	北長廻8号横穴墓 (2次調査・益田市) 葛ノ鼻B-1号墳 (益田市)	益田市鵜ノ鼻古墳群
		1~5期は 鳥根県立八雲立つ風土記の丘 1998より転載	
7			久本奥窯跡IV期 蘿地宅後古墳 森ヶ曾根古墳
8			久本奥窯跡V期 石見空港予定地 内道廻I期

第34図 石見の須恵器

編年基準				須惠器				周布平野				周布川左岸・南西地域				周布川右岸・北東地域				金城北部					
10期 編年	地輪	出雲	陶色	出雲	久本奥	石見	日御	大瀧	益田	周布	かんぐら	天田寺山	轟先後	轟後	日御1	日御2	日御3	日御4	金田1	金田2	左岸	右岸	下府川	右岸	下長屋
5	III	2期	Tk73																						
6	IV	3期古	TK216～ TK208																						
7	V古	V1段階	TK208																						
8		3期新	TK23	1期	1			IA・B		1															
500			TK47																						
550	9	V2段階	MT15	2期	2		II		2						O20?		?	○10		?	○10	?	○9	○10	?
10		V3段階	TK10	TK43	3期	3	III										?	○10?	:	○10	?	○10	?	○9	○10
600			TK209	4期	4	I	IV		3								?	(手刷)							?
650	終	地輪	飛鳥 I	5・6a期	5・6A	II											?	?							
650	未	な	飛鳥 II	6b・c期	6b	III	V										?	?							
650	期	し	飛鳥 III	6d期	6c	VI											?	?							
			飛鳥 IV	7期	7	IV	VII										?	?							
			飛鳥 V・ 平城 I	8期	8	V			I	6							?	?							
				(系切り)																					

出雲地域の編年基準は島根県教育委員会2003「島根県古代文化センター調査研究報告書16 宮山古墳群の研究」

島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財カタログ2004「島根県古代文化センター調査研究報告書23 松江市東部における古墳の調査」を基に作成

凡例 ○円墳 ●前方後円墳 ■前方後方墳 ?は痕跡不明

須恵器編年は田辺1981、大谷1994・2001、大阪府立近つ飛鳥博物館2006、埴輪編年は川西1978・1992、V期以前は大谷2003、出土物編年は藤永1997

石見地域の須恵器編年は、山陰構穴墓調査検討会1998・島根県立八雲立つ風土記の丘1998・島根県教育委員会1985・1992・1995・増野2001を基に作成
ただし、7期以前は出雲地域に併せて新たに追加した。

第4表 古墳編年表



周布古墳全景（西側より）



周布古墳全景（真上より）



T1 溝検出状況



T1 と前方部前端



T1 溝



T2 転落葺石検出状況



T2 蓐石基底石と後円部



T2 蓐石基底石



T3



T3 と後円部



T4 転落葺石検出状況



T4 周溝（拡張後）



T4 土層



T5 転落葺石検出状況



T5 周溝



T5 土層（填丘側）



T5 土層（外側）



T5 蓐石基底石



T6 転落葺石検出状況



T6



T6 土層



T7



T8



T9



T9 填丘側



T9 土層



T10 転落葺石検出状況



T10 壁輸出土状況



T10 蓋石基底石



T10 土層



T11



T10・T11と填丘



T12



T12と後円部



T13 と前方部前端



T13



T13 溝



作業状況



現地説明会



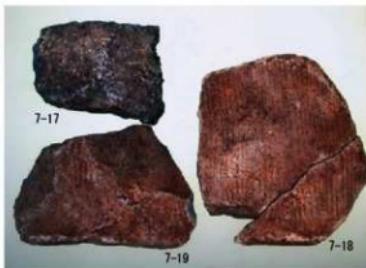
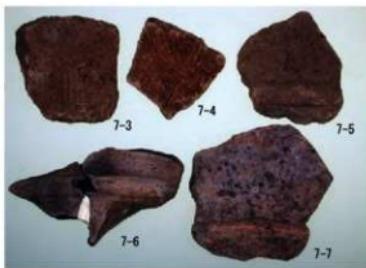
古墳全景

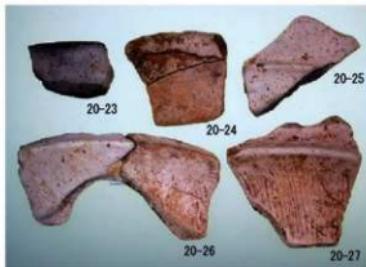
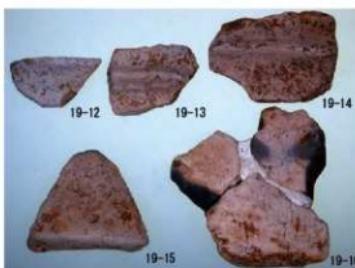
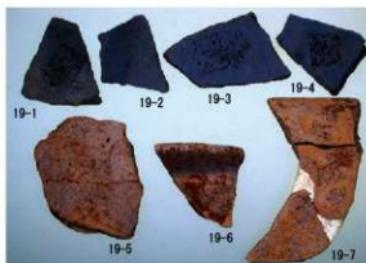


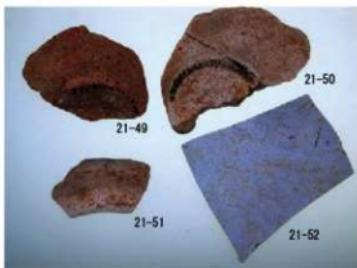
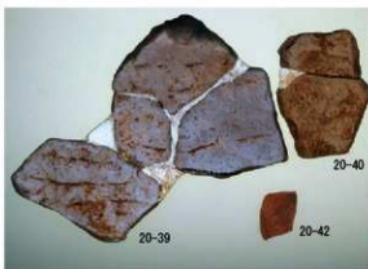
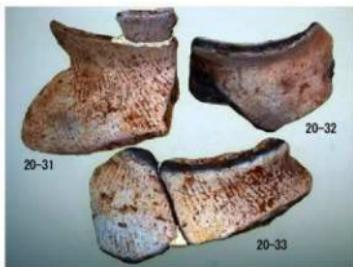
填丘（くびれ部）



填丘（後円部）









藏地宅後古墳（北より）



藏地宅後古墳（西より）



石室調査前



崖面の状況（右上が奥壁）



T1 周溝



T1 土層



T2



T2（奥壁側より）



T3 上層遺物出土状況



T3 下層遺物出土状況



T3



T4



T5 南壁（側壁掘形）



T5 北壁（石室内緩断土層）



T5 (羨道側より)



T5 拡張部遺物出土状況 1



T5 拡張部遺物出土状況 2



T5 拡張部



T5 拡張部土層



調査区全景（差道部側より）

